

花菜「いつもえがおで、まっけてくれるね。
みんな・・・ありがとう」

花菜「はじめまして！かいせつかかりの花菜です。

このおはなしをてにとつてくれてありがとう、うれしいな。

それで、ええと・・・このおはなしには、わたしのかんがえた、

『すまいる』っていう、ひととひととがなかよくなれる楽しみや、

みんなのころがあったかくなる楽しいことがかかれてるんです。

それで、その『すまいる』は、このおはなしをよんでくれるひとが、

『すまいる』をつかって、じぶんで、ほんとにたのしむことのできるものなんだ。

『すまいる』も、このおはなしも、みててわるいきにはならないとおもうし、

みてってもらえて、『すまいる』をたのしんでもらえると、なんかうれしいな」

花菜「それでね、この、いまよんでもらっている『あいさつともくじ』には、

このおはなしをよんでもらううえでの、しっておいてほしいことがかいてあるんだ。

そんなになくはないし、よんでってほしいです」

花菜「つぎはさっそく、『すまいる』のしょうかいつきのもくじだよ。

このおはなしでしようかいされてる、

『すまいる』のかかれてるページが、のってるんだ。

もくじには、それぞれの『すまいる』がどんないいものかっていることを、

ちよつとでもわかりやすくするためのことがかかれてます。

それをみてどの『すまいる』から楽しむか、かんがえてみてね」

あいさつともくじ ↓ 02ページ ↓ あいさつともくじとおはなしのよみかた

花菜「いまよんでくれてる、このことだよ。

もくじから、どのすまいるをえらんでよむかにつかってみてもらいたいな」

おしらせをつくる ↓ 07ページ ↓ たくさんのひとにみてもらうおしらせづくり

花菜「おつたえしたいことを、かみにかいてはったり、くばったりするっていう、

つたえたいことをまわりのひとにいろいろみてもらうすまいるなんだ。

しんぶんとかポスターなんかに、にてるよ。

みのまわりのことや、じぶんのかきたいことや、絵をのせることなんかも

かいてのせるといいかなっておもう。

いろいろなひとでちからをあわせて、みんなでつくりあげることをして、

それでみんながなかよくなれるっていう、そういうよさもあるすまいるなんだ」

ありがとういうおう ↓ 17ページ ↓ うれしいことばをたくさんいうとみんなうれしい
花菜「『ありがとう』とか『がんばって』っていうような、

そういういいことばを、たくさんいうことで、

いろんなひとたちがうれしくなるとか、やるきがでるっていうすまいるだよ。

いろいろなところで、いろいろなひとにつかってもらえるすまいるなんだ。

このすまいるをすることで、すまいるをつかうひとだけとちがって、

すまいるをいってもらうひとたちもいっしょになって、

たくさんひとがしあわせになれるっていうすまいるなんじゃないかな」

はなながきたとき ↓ 22ページ ↓ 花菜がはじめて楽校にきた日

花菜「わたしがこの楽校にはじめてきたときのおはなしなんだ。

わたしの楽校のみんなのことと、どんな楽校なのかについてかいてあるんだよ。

楽校のみんなが、どんなひとかっていうのと、

どんな楽校かをしたいひとに、よんでみてほしいな・・・。

このおはなしでは、すまいるのしょうかいは、

あまりかかれてないんだ。ゴメンね。

すまいるのかかっているおはなしをよみたいひとは、そっちをさきによんでみて」

なかまのけんてい ↓ 30ページ ↓ みんなのこのくわしさをこたえあいわかりあう

花菜「いろいろなことのもんだいを、なかよしでだしあうすまいるなんだ。

なかよしになりたいひとのこともっとしりあうとか、

もっとくわしくなりあうのにやくにたつかもしれない。

しらないことをおしえあうとか、くわしさをくらべあうたのしさもあるっていう、

そういうよさも、もってるすまいるなんだよ」

みんなでのにつき ↓ 43ページ ↓ 日記のへんじをみんなでかきあいたのしくなる
花菜「こうかん日記をみんなでするっていうすまいるだよ。

学校や、おうちでつかえるんだ。

みんなでみんなのことをわかりあうっていうよさがあるかな。

つたえておきたいことやナイシヨのことを、ふたりよりおおくのひとたちのあいだで、つたえあい、しりあい、みんなをわかりあうことができるっていう、べんりで楽しい、なかよしがもつとなかよしになれるすまいるだとおもうよ」

みじかいうたかい ↓ 51ページ ↓ みじかい歌を歌ってなかよしでもりあがる

花菜「音楽をながさずに、みじかい歌だけを歌うっていうすまいるだよ。

てがるで、みんなでいっしょにしやすい、ワイワイできるすまいるなんだ。

どうぐをつかわないし、それにどこでもできるし、

きがるにたのしんでほしいな。

ふだんはあまり歌を歌わないひとにも、たのしんでもらえるとたのしいとおもうよ」

もちよりあつまり ↓ 59ページ ↓ みんなであつまりもちよったものでたのしむ

花菜「なかのいいひとたちで、いろいろなものをもってあつまって、

みんなでいっしょに、もってあつまったもので楽しむとか、

こうかんしあたり、どんなのがすきかっていうことを

みんなでしりあってもらえる、そういうすまいるなんだ。

おかしや音楽や本なんかを、もってあつまるとたのしいかな。

ワイワイしたいひとたちみんなにしてみらえるとたのしいとおもうよ」

たのしみおくらう ↓ 68ページ ↓ たのしんでもらうことでじぶんがうれしくなる

花菜「たのしみたいひととか、さいきんあまりたのしめていないひとたちに、

たのしんでもらえることをするっていう、すまいるなんだ。

絵本をよむとか、歌を歌うとか、がつきをひいてきいてもらうとか、

そういうことをして、たのしんでもらって、それがみんなのすまいるに

なるかなっておもってるんだ。みんなでたのしんでみてほしいな」

みんなのおはなし ↓ 76ページ ↓ ほんとにいる人がでてくるおはなしづくり

花菜「ほんとうにいるひとたちのでてくるっていう、

そういうおはなしをかんがえてつくるすまいるだよ。

ぜんぶじぶんでかんがえてもいいし、でてくるひとたちを、しりあいのひとにかえるだけでも、たのしいおはなしになるんだ。みんなでじょうだんみたいなの、そういうおはなしをかんがえろとか、きもちのこもったおはなしをかんがえて、それをみたりきいたりしてもらおうと、よろこんでもらえるかなっておもってるよ」

ひとそしてねがい ↓ 87ページ ↓ 花菜が楽校にいなかった日

花菜「わたしについてのおはなしです。」

このおはなしは、ほかのおはなしをよみおわったあとに
よんでももらいたくなっておもっています」

花菜「ここまでで、もくじと『すまいる』のかいせつはおわりです。

よさそうとおもったすまいるから、よんでみてほしいです」

花菜「それでね、きいてほしいことがあるんだ。

このおはなしでは、よみたいページからよんでいてほしいんだ。

どういうことかっていうと、もくじにかいてあるページのじゅんばんをきにせず、
すきなページや楽しんでみたい『すまいる』のかいてあるページから

よんでいってもらえると、わたしのおもってる、

よんでももらいたいよみかたとおなじで、

もっと楽しめてもらえるかなっておもってるっていうことなんだ。

そういうことで、ページのじゅんばんどおりによまず、

みてるひとのすきなように、

よみたい『すまいる』のかいてあるところからよむっていう、

そういうよみかたでよんでみてほしいかな。

ややこしいことってゴメン。でも、そういうよみかたのほうが、

もっとたくさん、このおはなしを楽しんでももらえるかなっておもっています。

それと・・・さいごに『ひとそしてねがい』をよんでもらったほうが

おはなしぜんたいをもっと楽しめるかな・・・」

花菜「あと、これはすぐくつたえたいことなんだけど・・・。

このおはなしでは、わたしのかんがえた『すまいる』っていう

ひとと、ひととがなかよくなれる、たのしいことがたくさんでてるんだ。わたしとしては、その『すまいる』を、このおはなしをよんでくれたひとに、じっさいに試みて、楽しんでほしいとおもってるんです。

このおはなしをよんで、そしてそのおはなしのなかにでてる、『すまいる』をじっさいに楽しんでもらうことで、

このおはなしのホントのよさを

楽しんでもらえるんじゃないかなっておもってます。

だから・・・よむだけでなく、ホントにたのしんでみてください。そのことをしっておいてください。よろしくおねがいします」

花菜「はじめにながいことゴメンなさい。

じゃ、みなさんがもっとえがおになってくれますように・・・。

このすまいるのおはなし、はじまりはじまりです!」

花菜「おひるやすみのじかんになって、

おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたし・・・の3にんはいま、
楽校のしょくどうにいます。おなかすいた・・・ぐー」

音々「なな、いつも、かいせつ、ありがとおなあ」

文乃「かいせつありがとー、ななちゃん。ウチもおなかすいたわー」

花菜「これがわたしのやくめだから・・・」

それにしても、楽校のあちこちのかべにはつてあるこのかみ、なんなの・・・？
音々「うん、せつめいすんのはむずかしいようなかんたんなような、なんやけど、

まあそれはな、しんぶん部のつくってる、楽校しんぶんとかいうもんなんやで」

花菜「楽校しんぶん・・・でもこれ、おとねえちゃんのことばかり、かいてあるよ」

音々「まあ、ブチョーのちからで、そういうボクだらけのなかみにされとるみたいやわ」

文乃「あははー、ウチらの楽校にはゲンロンのジューがあらへんみたいやねー」

花菜「なぬ、なんなんだろ？このしんぶん・・・」

おとねえちゃんのシャシンとか、シャシンとか、シャシンとか、がはってあって、
あと、おとねえちゃんへのラヴソングもかいてあるし・・・

おとねえちゃんのためのコーソクなんていうのもかいてあるよ」

音々「ボクのことばっかなんて、なにかんがえとんだか、あのブチョー」

文乃「おとねえのことばっかいかいてあるのはこまるんやけど、

ふーきーん会でも、なんかこーゆー、しんぶんみたいなんつくれるといーやんねー」

音々「うん、そやなあ。ふーきーん会のかつどうをかくっていうんもええかもなあ」

文乃「ななちゃんー、ウチらがこーいうんつくるとして、こんなんつくるとえーとか、
なんかいいすまいる、あらへんかなー？どーかなー？」

花菜「ううん、そうだね・・・」

・・・おしらせをつくる・・・なんかどうかな・・・」

音々「おしらせを・・・つくるん？どんなすまいるなんやる」

文乃「へーおしらせをみてもらうんかー、どんななんんー？どきどきー」

おしらせをつくる ↓ たくさんのひとにみてもらうおしらせづくり

文乃「おしらせをつくるって、どういうことなんー？」

花菜「↓ こんすまいる ↑ っていうのをいうね。

おしらせや、しんぶんや、はりがみをつくって、

そしてそのつくったものを、みぢかなひとに、みせるとか、くばるとかすると、たのしいし、それだけとちがって、やくにもたつかなくておもうんだ。

音々「よおするに、しんぶんのようなものをつくって、

ほかのひとにいろいろなやりかたで、みてもらうってことやね」

音々「そんで、どんなとこがいいとこか、おしえてもらっていい？」

花菜「うん。 ↓ こんないいところ ↑ はどんなのかっていうと・・・。

まず、つくりあげるたのしさがあるんだ。おしらせをのせるだけとちがって、じぶんのつくりたいものをみせるところができて、詩やハイクをのせたり、絵をのせたり、シャシンをのせたり・・・ほかにもいろいろのせられて、それをみてくれるひとに、みてもらえるよ。

みてもらえるとおもってつくるのって、たのしいことだとおもう。

音々「お力タイしんぶんみたいなきじだけとちやうおしらせをつくって、それをみてもらうのをかんがえながらつくるんがたのしんやな」

花菜「うん、そう。つくるおしらせのなかみは、

おうちのなかでの、こどものことや、ペットのことで、

それをおうちにかざっておくとか、おともだちにみてもらうとか・・・、

ほかのところにおくなら、部活や課や社のことなんかをかくといいとおもうんだ。

それから、福祉施設や学校のきょうしつのなかでのことも、

それぞれに、どこかのばしょにおいておくといいいとおもう。

そのつくったものをみてもらうのがたのしんかなっておもうんだ」

文乃「いろいろなところにおいてー、いろいろなひとにみてもらえるすまいるなんやねー」

音々「たくさんひとにみてもらえるっていうんがええなあ」

文乃「つくるの、たいへんなんー？どんなふうにつくったらええのんー？」

花菜「 ↓ こんないいもの ↑ がどんなのかっていうと、

かんたんにもつくれるし、こったものにすることもできるんだ。

かんたんにてがるにつくってもいいし、てまをかけてホンカクテキなのでもいいよ。

エンピツとかみでかいただけでの、ちょっとしたおしらせでもいいし、

キカイで編集した、もっとしっかりしたのでもいい。

それと、もともになるつくったかみを、コピーしてふやすために、

おうちにあるような、かんたんないんさつきをつかってもいいし、

おみせのコピー機をつかってコピーしてもいいかな。

そいだから、カベやコピーしたものを置いておける、みせるところがあればできるよ。みせるところがなければ、みづかなひとに、てわたしでみせてもいいかな」

音々

「かんだんにも、ホンカクテキにもできるんやなあ。どっちでもできるなら、つくりたくなるひとがたくさんになりそうやなあ」

音々

「どんなおしらせを、どんなつくりかたでつくとええんやろ？」

文乃

「そやなー、そのあたり、きになるわー」

花菜

「ええと、それはね……。 ↓ こんなやりかた ↑ をいうね。

おしらせの、かみのおおきさは、おおきくても、ちいさくてもいいんだ。

おしらせは、ひとりでつくってもいいし、みんなでつくってもいいとおもうよ。

ひとりでこだわりをもってつくってもいいし、

みんなでわいわいとたのしくつくってもいい……。

それと、いつつくるかや、つぎのおしらせまでにどれくらいの間をあけて、あたらしいおしらせをつくるかは、つくるひとにじゆうにかながえてほしいな。

かくきじは、しんぶんをまねしてもよくて、

しんぶんはだいたいはもじだけだけど、しんぶんのように、おしらせや、

シャシンや絵や四コママンガやニュースやハイクや詩や、

それと……社説のような、いいたいことをかいても、たのしいんじゃないかな。

みてくれるひとたちからもらったかんそうをのせてもいいし、

みてくれるひとに、かんそうとはまたちがう、おんがくのガクフや、

かいてもらったものを、のせてもたのしいよ。

いろは白黒でもいいし、いろがついててもいいとおもう。

音々

「おしらせをつくるとして、ほかにどんなのをかくのんかな？」

花菜

「そうだね……。

おうちにおくばあいは、こどもさんのせいちょうのきろくとか、

今月のばんごはんのよていをーかげつぶんかいておくとか、

かぞくのひとのすることのよていとか、おとうさんのとった、かぞくのシャシンとか、

そういうのをきじにかくとたのしくて、それにべんりだとおもうよ。

学校におくばあいには、ほごしゃのかたむけのきょうしつのできごととか、

えんそくにいったときのことをかいた、せいとさんのさくぶんとか、

ほかに、すきなきゅうしよくのアンケートをのせてもたのしいかもしれない。

福祉施設におくばあいのときには、入居者のかたのかいたハイクものせたいし、

こどもさんがあそびにきてくれたときにかいてくれた、にがえとか、

きせつにあわせたできごとをかくとたのしいかな」

文乃「みせるばしょにあわせて、おしらせにかくことがちてくるんやー」

音々「んで、さっきいうてみたいに、いちまいだけ、もとになるのをつくって、それをコピーしてふやしていくんやな」

花菜「うん・・・」。

かくことは、ほかのひとにいやなきもちをさせなければ、なにをかいてもいいよ。

それと、↓ だいじなところ ↑ は、

楽しいことだけを、のせるということがだいじだともうんだ。

くらいこと、かなしいこと、いやなきもちになることをのせないようにしてほしいな。それと、みづかなひとにくばるとか、手でわたしてみてもらうのがいいとおもう。

カベにはりつけるとか、どこかにおいておくのは、みてもえなないこともあるかも。

でも、おうちや福祉施設では、カベにはりつけても、おいておいてもみてももらえるし、そういう、おくばしょによってかえるところは、

つくるひとに、かいていいことかどうかやを、どういうふうにおくかを、

かんがえてみてほしいなっておもうんだ・・・」

笑魅「なるほどっ」

音々「えみ、きいとおったんか」

笑魅「きにすんなっ」

音々「どう、きにしいひんのか、よわからんわ」

笑魅「おしらせっ、つくるのたのしそうっ。えみもまぜてっ」

文乃「かまへんよー。みんなでつくったほうがたのしー」

笑魅「あとお、テサキとしてっ、なんにんかつ、よぼっ」

花菜「・・・で、ブチヨークン、タヌキくんにきてもらいました」

部長「いやあーっはっはっはっはっは。」

らんちたいむに、はうづゆづ。おとねえちゃん、みなさん

珠輝「いやっはあ、きたぞい。たのしいことをやるそうじゃのお。たのしみじゃわいな」

笑魅「きたかつ、えみのテサキっ」

音々「テサキって、ああたなあ。まあでも、みんなそろったわ」

珠輝「で、どんなおしらせをつくるのかのう？」

花菜「ふーきーん会しんぶん、なんかどうかな」

音々「よさそおやなあ」

文乃「それでいこー」

笑魅「ふーきーん会しんぶんっ、さっそくつくるぞっ」

花菜「・・・で、つくりおわりました」

音々「つくりおわるん、はやっ」

文乃「はなしのすすみかたのツゴージョーやねー」

珠輝「つくるってるとこは、わざわざかいせつしなくてもええんじやろうなあ」

笑魅「そこらへんのことはっ、いうまでもないっ」

花菜「こんかいのおしらせは、げんこうをかくのに2じかんで、カラーのにしました。そしてコピーしにいてってコピーしおわるに30ぶん、かかりました。

それと、コピーするどうぐは、ブチョーくんのコネでつかわせてもらって、20まいコピーするのにつかわせてもらいました。あとでおれいしよう・・・。ふーきーん会しんぶんには、いろいろかいてあります。

ふみのんちゃんのかいた、ふーきーん会についてのおしらせだけとちがい、おとねえちゃんの時や、ブチョーくんのとったシャシンものってます。

それと、えみちゃんのかいたゲームについてのコラムも・・・」

部長「花菜クン、かいせつ、てんきゅ！」

笑魅「ありがとガキッ、じゃっガツコウのケイジバンにつ、はりにいこっ」

花菜「というわけで、ケイジバンのまえまできたみんな」

音々「またしても、はなしがすすむの、はやっ」

文乃「またしても、はなしのツゴージョーやねー」

部長「ワタクシ、はっていくのだ」

花菜「ぺたぺたと、はっていつてくれるブチョーくん」

笑魅「はってみるとっ、このしんぶんっ、すぐくカツコよくみえるっ」

音々「たくさんコピーした、あまったぶんはケイジバンのまえにおいておくわ」

文乃「みてもらえるのー、たのしみー」

笑魅「あとっ、おいておいたのをっ、もってってもらえるのもっ」

部長「ケイジバンから、とおくにはなれて、

よんでくれるひとのことをながめることにするのだ」

花菜「ケイジバンからはなれて、とおくからながめるみんな」

笑魅「はやくっ、だれかよめっ」

音々「まだとおくにはなれて10びょうもたってへんがな」

花菜「そしてしばらくして・・・」

文乃「あっ、きたー」

花菜「みてる・・・、よんでるね」

笑魅「あつ、ああつ、よんでわらってるっ」

花菜「おいておいたの、もってかえってってくれるかな・・・」

笑魅「あつ」

文乃「ああつ」

音々「おおっ、いちまい、もってかえっていつてくれたっ！」

一同「いやったあつー!!」

笑魅「うれしーっ」

音々「がんばりが、むくわれたきぶん！」

文乃「よんでもらったうれしさだけとちごて、ウチらが、ひょーかされたきもちーっ」

部長「ワタクシたちのばあいとちがい、ふつうの学校では、おいておいたのを

もってかえってもらえないこともあるかもしれないのだ。

でも、おうちのなかや福祉施設でなら、ちゃんとよんでももらえるのだ。

おいておいたり、はったりするだけでなく、

ほかに、きょうしつのなかでくばったり、

ともだちのような、みぢかなひとに手でわたして、

じぶんの目のまえでみてもらえば、それでみてもらいやすくもなるとおもうのだ」

珠輝「つぎは、みゅーちゃんに、みてもらいにいくかの？」

一同「れつごっ」

花菜「と、いうわけで、みゅーちゃんのいるホケンしつへとやってきました」

部長「いやー！ーっはっはっはっは。あいすていなうなのだ、みゅーちゃん」

音々「いやは、みゅー」

美優「みんなーいっやっはー」

笑魅「デカイヒトにつ、きょうはいちおうトクベツについていいもんもってきたっ」

美優「なーなーなーにーなーなー？まえみたいになーなーカエルのヒモーな？」

音々「まあ、ゲテモノはたべられへんこともないけど、ふつうはひとにあげへんわな」

笑魅「それっ、まえにバカにくわしたよっ」

文乃「くわしたんかいなっ」

部長「いやあー！ーパリパリしてて、おいしかったのだ」

音々「おいしかったんかい」

珠輝「みゅーちゃんにの、ふーきーん会しんぶんをみせにきたんじゃ」

花菜「しんぶんをてわたす、タヌキくん」

美優「ありがとー。へー、みんなでつくったんやー」

部長「いやあー！ーそうなのだよ、みゅーちゃん」

花菜「ふーきーん会しんぶんをよむ、みゅーちゃん。どうおもつかな・・・」

美優「ふんふん~~~~・・・」

花菜「みゅーちゃんがよむのをみまもる、みんな」

美優「ふんふん~~~~、なるほど~~~~」

ふ〜き〜ん、こんなかつどうしてるんや~~~~。しらなかったわ~~~~」

文乃「そやでー。そこ、ウチがかいてんー」

美優「ふ〜き〜ん会つて~~~~、たのしそ~~~~やね~~~~」

若草「そやな。なな、ボクもおおもってもらえて、うれしいきがするわ」

美優「おとねちゃんの詩~~~~、ごっつえ~~~~で~~~~」

きれいで~~~~、なんてゆ〜か~~~~、

よんだあとにさわやかなきもちになれるわ~~~~」

音々「そおかあ。ボク、ふだん、詩をほとんどひとにみせへんねん。

でもこおやってみてもらえて、それにかんそうまでもらえてうれしいわあ」

部長「この詩は、ワタクシへのおもいをつづったものなのだ」

音々「へー」

美優「ちやうやる~~~~」

珠輝「あきらかにちがうのお」

花菜「すごいカンチガイ・・・」

笑魅「おんどりやつ」

美優「ブチヨ〜くんのフルカラ〜のしゃしん~~~~、じょうずやね~~~~」

部長「いやあーさすがみゅーちゃん、お目がたかいのだ。

これがシャシン部チヨーのジツリヨクなのだ」

珠輝「なんだか、おとねえちゃんをうつしたシャシンばつかじゃのお」

音々「へー」

部長「いやあーアイがつたわつてくるのだ」

音々「へー」

笑魅「あほんだらっ」

美優「このゲームのきじ〜えみちゃん~~~~ゲームがじよ〜ずなんやね~~~~」

笑魅「えっ? うん、まあ・・・」

美優「おかんも~~~~ゲームをちよつとあそぶねん~~~~」

笑魅「そう・・・」

美優「ゲ〜ムをじょうずにあそぶコツ〜またおしえてや~~~~」

笑魅「はいはいっ!」

部長「ここでいきよく。だいめいは、『』メンね、すなおになれなくて『』

珠輝「その歌、むかしの歌のかしでありそうなことばじゃなあ」

美優「みんなよくこんなすごいのでくれたね〜」

文乃「このすまいる、ななちゃんか、かんがえたんやでー」

花菜「・・・わたし、もとなるすまいるを、すこしかんがえただけなんだ。

げんこうをつくったのは、ほかのひとたちだよ・・・」

部長「みんながあつまれば、こんなすごいこともできるのだ。

ななちゃんも、つくったひとのりっぱなひとりなのだ。

げんこうをかいいたひと、コピーしたひと、くばったひと、ほかにも、

ちからをあわせたみんなが、つくったひとなのだ」

珠輝「そおじゃのお」

笑魅「だねっ」

花菜「・・・」。

音々「そやな」

花菜「・・・せーと会も、おしらせをつくってみると楽しいかもしれないね」

笑魅「いいかんがえっ、だねっ。でっ、つくるならどんなのつくるのっ？」

部長「では『うふっ、おとねちゃんダイスキ♡らぶらぶファンクラブしんぶん』をば、

せーと会としておつくりするのだ！」

美優「おとねちゃん、けんどうぶから、ぼくとうかりてきて〜」

おしらせをつくる ↓ たくさんのひとにみてもらうおしらせづくり ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ。」

おとねえちゃんとふみのんちゃんは、どっちもふーきーん会なんだね」

音々「ボクはいまはちゃうかなあ。むかしは、ふくいーんちょーやったんやで」

文乃「ウチー、いまでも、ふーきーんちょーやわー」

花菜「すごいね。どんなかつどうしてるの？」

文乃「そやなー、いーん会しつでおちゃしたりとかー」

音々「いっしょにテレビみるとか、まあ、とくになんもしてへんわ」

花菜「それ、どこがふーきーん会なんだろ・・・？」

花菜「そして、べつのひ」

文乃「みゅーちゃん、いやっはあー」

美優「ふみのんーちゃんー、いやーはあーはあーはあー」

文乃「ウチらの楽校、なんでまた、あいさつが、いやっはあなんやるー」

音々「それには、ブチョーがかんがえて、はやらせて、

わざわざコーソクにまでしたっていう、じじょうがあるみたいやで」

珠輝「コーソクか。ふおっふおっふお、なぞがおおいのう、あのブチョーは」

音々「コーソクにすることに、タヌキもいちまい、かんでるやるうに」

珠輝「ふおふおふお」

文乃「そいえば、いやっはあのまえは、イモーがあいさつやったねー」

音々「なにかんがえてんだか」

花菜「えみちゃんがやってきた」

笑魅「みんな、ヒマ」

文乃「ヒマって、あたらしいあいさつなん？」

花菜「あ、つぎはブチョーくんがビューーンと、はしってきた」

部長「みなさん、ヒモ」

文乃「ヒモってー」

音々「へー」

珠輝「みつがせるきかの？はやらせるきかの？コーソクにするきかの？」

音々「タヌキにいうとく、ヒモをコーソクにするのはカンベン」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「ねーねーっ、えみのかよってるガッコウのナマエってっ、なんていうのっ？」

文乃「えっ、なまえをしらへんやかよってたんー？」

珠輝「えみちゃんがニューガクガンシヨをどうやってかいたかきになるのう」

音々「そうようがっこうっていうんやで。カンジでかくと、こう。蒼遥楽校な。

あおい、に、はるか、ってかくねん。

ブチヨーが、がっこうを楽校ってかくことにコーソクできめたらしいなあ」

笑魅「うっ、むずかしいカンジのことをきくとズツウがっ」

珠輝「おとなになってから、リレキシヨに楽校とかくときにゆうきがあるわい」

花菜「あおい、はるか・・・」

花菜「いまは、たいいくのジュギヨウがおわろうとしていて、かたづけをしてるところ。

たいいくのときにはみんな、ちゃんとジュギヨウにしゅっせきするみたい……。いま、おとねちゃん、ふみのんちゃん、わたし……の3にんでいます」

音々「あんがとお。なののおかげでわかりやすいわあ」

文乃「かいせつしてくれていつもありがとう。みんな、たいいくはすきなんやねー」

花菜「かいせつで、やくにたてて、よかった……。」

音々「ななはかんしゃされじょうずやなあ」

文乃「ほんまやねー」

花菜「たいしたこと、してないよ……。」

文乃「かたづけ、はよせなあー」

花菜「えっさ、ほいさ」

音々「けっこお、たいへんやなあ」

文乃「がんばってこー」

花菜「……。で、かたづけおわかりました」

笑魅「あつ、きれいにかたづいてるっ。マジミはっ、かたづけもまじめにやるんだねっ」

文乃「まー、いちおー、マジミやからかなー」

音々「ああたは、やらへんかったんかいな」

笑魅「どんまーいっ」

音々「じぶんでいうか」

笑魅「ちゃんとかたづけてくれてっ、なんていうかつ、そのっ、ごによごによごによっ」

花菜「ごによごによごによ……。?」

音々「ふふふ、うまくいわれへんねんな」

笑魅「あんまっいいじんなっ」

文乃「きもちはつたわってくるでー」

花菜「???」

笑魅「えみっ、ありがとうかつ、そういうじぶんのきもちをつ、ほかのひとにつ、

どういうふうにいえばうまくいえるかつ、かんがえてるんだっ。

でもっ、どうすればいいのかつ、よくわからないっ」

音々「うまくきもちをつたえられへんのかあ、そろこまったもんやなあ。

ん、でもボクもそういう、きもちをつたえるの、にがてかなあ」

文乃「うーん、おとねえも、えみちゃんも、あんがいクチベタなんやるかー」

花菜「……。わたしも、じぶんのきもちって、あんまりうまくいえないんだ」

文乃「ウチもそやわー。みんな、おなじなんやねー」

音々「そやなあ」

笑魅「ありがとうってきもちのほかもつ、うまくいえないっ」

花菜「わたしも、ほかのことばもうまくいえないな・・・。」

こういう、ちゃんとすなおに、じぶんのきもちをいうのって、

とてもだいじなことだとおもう・・・」

音々「うん、そういうことをいえるのって、にんげんとして、だいじなことやおもうわ」

文乃「そやねー、こういうことをもつとたくさんいえるようになるといいなー」

音々「りそおといえ、りそおかもしれんけど、でもだいじなこっちゃとおもうで」

花菜「そうだね・・・」

音々「なな、そういうとこを、すまいるでうまく、なんとかならんやるか？」

笑魅「トガキつ、なんかいいすまいるかんがえてっ」

花菜「ちよつとまってるね、かんがえてみる・・・。」

・・・ありがとうを、いえばいいかな・・・」

笑魅「ありがとういうってっ、なんなのっ？」

文乃「きになるー」

ありがとういう ↓ うれしいことばをたくさんいうとみんなうれしい

花菜「ありがとうをいうっていうのは・・・、

いろいろなひとに、『ありがとう』とか『いいところあるなあ』とか、

『がんばれー』『きらくにやれよ』『すごい』『がんばったね』

『じょうずだね』というようなことばを、たくさんいおうっていうことなんだ」

音々「そういうことばを、いうん？」

花菜「うん。そういうことばをふだんからたくさんいうようにきをつけてると、

じぶんのうれしさとか、ありがとうとか、ほかにもいろいろなきもちを、

まわりのひとたちにたくさんいえるんじゃないかなっておもっている、

↓ こんなすまいる ↑ なんだ」

笑魅「そういうことかっ」

音々「いつもから、いおういおうと、きをつけるのがだいじてこっちゃんね」

花菜「そうだとおもうよ。それと、いろいろなひとがうれしくなれるとおもうんだ。

いうひともじぶんのきもちを、すなおにつたえられてうれしい、

いわれるひともげんきがでるとか、ほめてもらえてやるきがでくるとか、

いうひともいわれるひとも、どっちもうれしいきもちになれるよ。

そういう、みんながうれしくなるのが ↓ こんないところ ↑ かな・・・」

笑魅 「そのすまいるっ、もらったっ」

文乃 「って、さいしょからえみちゃんのためにかんがえたっていうとるがなっ」

笑魅 「ツツコミ『ありがとう』」

文乃 「えみちゃん、『じょうずなきもちのつたえかたやねー』」

笑魅 「よしっ」

音々 「さっそく、すまいるをつことるなあ」

花菜 「↓ こんないるもの ↑ は、とくにないかな」

音々 「てがるで『いいすまいるやね』」

花菜 「『ありがとう・・・』」

文乃 「みんな、このすまいるをかんたんにつかえとるなー。つかいやすいわー」

花菜 「↓ こんなやりかた ↑ は、いくつかいうと、

なにかしてもらったときに『ありがとう』。

いいことをしたひとに『いいところあるね』。

がんばってるひとに『がんばれー』。

きもちをかるくさせるために『ぎらくにやれよ』。

がんばったひとに『すごい』とか『がんばったね』。

というようなことをいうといいとおもう。

ほかにもいろいろなことばをかんがえてつかうと、もっとよくなるかも・・・」

音々 「それって、どれもいわれてうれしいことばやんなあ」

文乃 「いうひともいわれるひと、うれしくなるわー」

笑魅 「ガリベンのいうとおり、『いいすまいるっだねっ』」

花菜 「『そういつてもらえて、うれしい・・・』」

笑魅 「このすまいるをつかってっ、

ほかのいろいろなひとにつ、いろいろっ、いいにいこっ」

花菜 「・・・ということで、いま、4人で楽校のなかをあちこちあるいています」

笑魅 「あっ、ちょうどバカがいるっ。ちょいどいいやつ、ねえっバカっ」

部長 「いやあーっはっはっはっは。ぐだふたぬん、おとねえちゃん、みなさん」

音々 「まえからおもってん。ブチヨーは、いつべんきようしとんの？」

部長 「いやあーっはっはっは。じかんがあるときにやっていて、

とくにいつというわけとちがうのだ。それと、もちろんドクガクでなのだ」

笑魅 「それでテストのてんすうがいいなんてっ、『やるねっ』」

部長 「いやあーっはっはっはっは。これしきのこと、

イガク部をめざすなら、やるのはあたりまえといえるのだ」

音々「ブチヨーがイシャになると、まちがいない。ひとのいのちがあやうい」

笑魅「バカはバカなのにベンキョーだけできてもっ、ねっ」

笑魅「ガリベンもベンきょうしすぎやし、『きらくにやれっ』『』」

音々「たしかにそおやなあ。しんぱいしてくれて、『ありがとお』『』」

花菜「ところで、なんでブチヨーくんはホウキもってるの?」

部長「これは珠輝クンのあいであなのだ。珠輝クン、こちらへかもん!」

花菜「こちらへ、やってくるタヌキくん」

珠輝「いやっはあ、おわかいの。えみちゃん、いつもべっぴんさんじゃのう」

笑魅「うんっ、よくわかってるねっ、『うれしいなっ』『』」

珠輝「おとねえちゃん、メガネがにあっとるわい」

音々「『うれしい』けど、それはひにくにきこえへんこともないきがするわ。

それとな、ホウキもって、なにしとったん?」

珠輝「これは、せーと会のもよおしで、せーと会で、楽校の、おおそうじをしとったんじゃ」

文乃「いいだしたのは、タヌキくんなんやんねー」

笑魅「シタツパっ、『いいところあるねっ』『』」

文乃「そういうことって、だいたいのひとには、『なかなかできることとちゃう』『』でー」

珠輝「ふおっふおふおお。うれしいことをいうてくれるのお。

やってるやりがいができてうれしいぞな。

まあ、このおおそうじも、おんなのこからのヒョー力をよくするためじゃわい」

笑魅「あははははははははは。うっかりっ、ほんねがでてるよっ」

音々「ほんとのきもちなんだか、なんなんだか」

珠輝「ふおっふおっふおっ」

音々「せーと会って、こういうボランティアのようなこと、

しよっちゅうやつとるやんね。『えらいとおもっわ』『』」

部長「いやあー……っはっはははは。」

おとねえちゃんのくちから、そんなあまいせりふが!」

音々「へー」

珠輝「いまの、あまかったかのお?」

笑魅「あまいでおもいだしたっ。

えみっ、いつもおかしくれてるっ、シヨクドウにいつてくるっ」

文乃「ウチらもいくわー」

花菜「せーと会のみんな、『おおそうじ、ありがとっ』『』。それと、『がんばって

部長「おまかせありませなのだ!」

それとおとねちゃん、またなにかあったら、ワタクシをたよってほしいのだ。
おとねちゃんのためなら、おおそうじなんぞのごとき！なのだ」

音々「へー」

笑魅「ガリベンっ、そこはありがとうっていわなくていいぞっ」

花菜「で・・・いろいろあつて、シヨクドウにやってきました」

笑魅「さっそくだけどっ、シヨクドウのチヨーリブのひとたちっ、

おいしいゴハンやおかしをくれてっ、『いっつもっ、ありがとう』」

部員「ホントっ！？ふふふふふっ、そういつてもらえて、すごくうれしい」

笑魅「えっ、そうっ？

えみはっ、いつもいろいろしてもらってっ、

それでありがとつてっ、あたりまえのおれいをいっただけだよっ」

部員「わたしたちは、じぶんたちのつくったものでよるこんでもらえるのが、

イチバンうれしいことなんやわ。ありがとうっていつてもらえるの、

ホンマにうれしいし、それに、がんばりたくなることなんやで。

だから・・・ホンマにうれしい」

音々「そうなんやね。ありがとうが、こんなに、ひとのちからになるんやなあ」

文乃「ななちゃんー、えーすまいるやねー」

花菜「・・・うん」

笑魅「それならっ、3ニンにもいつもいろいろしてもらってるしっ、いっとくっ、

3ニンともっ『ジミなとこっ、もっとがんばれっ』」

三人「ってそれ、どういいうみやねんっ！」

ありがとういおう ↓ うれしいことばをたくさんいうとみんなうれしい ↓ おしまい

はなながきたとき ↓ 花菜がはじめて楽校にきた日

花菜「(きょうから、あたらしい学校……。こんどこそ、ちゃんとやっていこう……。)」
教師「花菜くん、きょうしつにはいりなさい」

花菜「(ガラガラッ)」

(あれ……。せいと、ふたりだけ……。?)

教師「ホームルームはじめます。てんこーせーです。

花菜さんです。ホームルームおわります。」

花菜「(え、それだけ……。?)

あ、ふたりがやってきた、ちゃんとしないと……。)

音々「はななさんというんやね。

ボクは、おとねっていうねん。おとねってよんだってや」

文乃「ウチは、ふみのってゆーんやわ。ウチのことみんな、ふみのんってよんでんねん。
はななさんも、ふみのんてよんでほしいわー。なかよーしたってなー」

花菜「はななっています……。よろしくおねがいます」

文乃「はななさんのこと、ななちゃんてよんでいい?」

花菜「うん……。」

二人「よかった、フツーのひとだ……。」

花菜「???」

音々「ボくらふたり、楽校ではマジメでジミっていうのでおってんねん」

文乃「みてのとおり、ウチと、おとねえはジミやでー」

音々「つぎのじゅぎょうまでのあいだ、楽校のなかをあんないするわ。きてやあ」

花菜「うん……。」

花菜「(学校のなかにわにきたけど、なんか、おおごえで歌ってるひとが……。)」

笑魅「ヤミヨにかがやくうううううううううう、くるマゝああスクううう♪」

音々「えみっ、ええとこにおったわ。こっちきいっ」

笑魅「なになにつ、どしたのっ」

花菜「(ごどもっばい、このコ、なんさいなんだろう……。?)」

音々「きょう、ボクらの楽校にてんこうしてきた、はななっていうコやねんで。

んで、このコは、えみ、な。」

笑魅「リョーカイっ、えみだよっ、よろしくねっ」

花菜「うん・・・」

笑魅「バナナっ、くらいぞっ」

花菜「バナナくらい・・・？」

音々「ああ、えみはなんかとへんなあだなをつけるんやわ」

文乃「ウチは、ミスメガネってえみちゃんによべれとんのやで」

音々「ボクなんか、えみから、ガリベンっていう、へんなあだなでよべれとる」

笑魅「バナナってなまえだからっ、にたことばでバナナっ」

花菜「え・・・それでバナナ・・・」

笑魅「バナナっ、もっとあかるくいけっ」

花菜「うん・・・」

音々「へんなあだなつけとるからやる。むちゃいうとるな」

笑魅「しょうがないなっ、ほらっ、ミソラーメンひとくちやるからゲンキだせっ」

音々「もちあるいとんのかい、しるもの。しかもやたらでかいどんぶりで」

文乃「もらえるの、バナナとちごて、ごめんね」

笑魅「あはははははっ。ミスメガネっ、うまいっ」

文乃「えへえへー」

花菜「・・・」

笑魅「バナナっ、わらえっ」

文乃「うーん、ウチ、バナナだけにすべったんかなー」

ななちゃん、バナナのボケ、ネタのつもりやってん、ごめんなー」

花菜「うん・・・」

笑魅「バナナとちがうあだなもかんがえとくっ。それとつタカラナボタモチもやるっ」

音々「かわったなまえのボタモチやな」

花菜「おとねえちゃん、学校のろうかでなんかさわいでるよ・・・」

音々「ああ、あれは鰻盛をやっとなのやわ」

花菜「アジモリ・・・？」

文乃「ウチらの楽校がいまどんなかんじか、いうところかー」

音々「そやな」

まず、チコク、ソウタイ、ケッセキはあたりまえで、
じゅぎょうをうけとるせいとはほとんどおらんのやわ。

んで、センセイはしんようされてなくて、だれもいうことをきかん。

それと、シヨクドウで、ちょうり部がごはんつくってくれたり、

タヌキは、ほんとのなまえはタマキっていうねんで」

笑魅「おんなのこっぽいカッコしてるけどっ、おとこだよっ」

珠輝「たまに、おんなのこかと、なまえとふくそうでまちがえられるわい」

花菜「そう・・・。タヌキくん、なんでおんなのこみたいなカッコしてるの?」

珠輝「せーとかいちよーのブチヨーにいわれたからじゃ。」

それと、おんなのこのカッコのほうが、なんだかおちつくからじゃないな」

音々「いうとくけど、タヌキは、かなりのおんなのこずきやからきいつけや」

花菜「さっき、いろいろいわれた・・・」

珠輝「おどろかせてすまんかったの、ななちゃん」

文乃「タヌキくん、せーと会のフクカイチヨーをしとるねん」

珠輝「まあ、たいしたことしとるとおもっとくれ」

笑魅「あからさまなウリモンクっ」

花菜「・・・うん」

珠輝「ふおっふおっふお、ななちゃんはしょうじきじゃのう」

文乃「でも、タヌキくんのいいかた、

ネタかどうか、ちよっとわからんいいかたやったでー」

珠輝「ふおふおふお」

花菜「ブチヨーとか、セイトカイチヨーって・・・?」

部長「いやぁーはっはっはっは。よくぞきいてくれたのだ。

ぐもにん、おとねえちゃん、みなさん」

花菜「わっ」

音々「いやは。いきなしあらわれた、このひとはブチヨーっていつて、

ボクらの楽校のせーと会チヨーと、いろいろなブカツのブチヨーをやっとるねんで」

部長「いやぁーおとねえちゃん、そんなもちあげちゃって!」

音々「へー」

珠輝「もちあげたかどうかはともかく、あとでたたきおとされるかものう」

笑魅「バカにっ、アイスやるっ。とけてるけどくえっ」

文乃「つて、いらんもん、くわせとるだけやがなっ」

音々「ふくろのなか、かじゅう100パーセントジュースみたいになっとるで」

笑魅「とけまくってベットベトになったチヨコもあるよっ」

音々「もちあるいんとんのかい、とけるようなんばっか」

部長「ではアイスをば、さっそくちようだいさせてもらうのだ。

ごきゅごきゅごきゅ。ぷっはーっ。おーでりいしやす!

うん、このアイス、なんともさわやかなのどごしつ、なのだ」

音々「そのいいかた、アイスっていうより、まるで鰻みたいやな」

花菜「アジ・・・？」

音々「うん、まあ、なあ。鰻」

文乃「鰻、ねー」

部長「それにしても、花菜クンてば、お、と、な、し、そ。なコなのだ。

どこのブカツにはいるかはきめたのですかな？」

花菜「うん・・・」

部長「ふんだらば、かいせつかかりをしていたきたいのだ！」

音々「なんやそら」

花菜「かいせつかかり・・・？」

部長「花菜クンのみのまわりでおこったできごとを、

かいせつしていく、というかかりなのだ」

音々「けったいなかりやな」

部長「ために、ワタクシのふあっしょんを、かいせつをばしていただきたいのだ」

花菜「ええと・・・、うえもしたも青で、ベルトもネクタイもクツも青で・・・なにこれ？

ぜんぶ青で・・・おまけに、シャツもズボンも、

おなじ青のチェックのがらでまとめられてる・・・」

部長「おげ！」

笑魅「へんっ、へんっ！」

花菜「すぐへんなカッコ・・・」

部長「花菜クン、おげ！のかいせつぷりーず！」

珠輝「おげっていわれてものう」

花菜「おっけー・・・ってこと・・・？」

部長「べりぎゅー！」

花菜「べりーぐっど」

文乃「ななちゃん、よくわかるねー」

部長「ざっつらいっ！」

では、てんこうきねんに、このせいふくのスカートをば花菜クンにさしあげるのだ。

ぜひ、みにつけてほしいのだ。はやく楽校のみんなに、なじめるように、なのだ」

花菜「うん・・・」

美優「あれ〜。てんこ〜せ〜？」

文乃「ななちゃんー、かいせつかいせつー」

笑魅「なにっ『すまいる』ってっ？」

花菜「みんながもつと、すまいるになれること・・・」

音々「ほんまやねえ。なながともだちをひるげてったような、

そういうすまいるになれることを、もつとひるげていけるとええなあ」

部長「それでは花菜クンに、『すまいる』をかんがえるかかりをおねがいのだ」

花菜「え・・・わたしが？」

美優「そやなくく、ななちゃんがそういうかかりになると、みんなよろこぶでくくく」

花菜「・・・」。

珠輝「そういうかかりが、ななちゃんにむいとるとおもうぞな」

花菜「でもわたし・・・そんなことできない・・・むりだよ・・・」

部長「せーと会チヨーけんげんで、たったいまきめたのだ。

花菜クンを『すまいる』をかんがえるかかりとするのだ！」

花菜「・・・」。

笑魅「バカのいうことっ、むりがちよつとあるっていうかつ、

かなりあるけどっ、でもきまりっ」

部長「花菜クン、さっそく、いまさっきいった、

なかよしをふやす『すまいる』のかいせつぷりいず！」

花菜「・・・」。

↓ なかよしをふやす ↑ ・・・。

ともだちをべつのもだちにおしえたり、おしえられたりするといいいとおもう。

じぶんひとりでもだちをふやすのは、たしざんみたいなこと。

だけど、ともだちのもだちをおしえてもらうのは、

かけざんみたいになかよしがいっぱいにふえていくんだ・・・。

なかよしがたくさんになる・・・」

部長「『すまいる』のかいせつ、ぐっつっ！」

文乃「さっそく、ひとつめの『すまいる』がきたんやねー」

音々「なな、いまの『すまいる』、すごいよかったで」

珠輝「クチベタなワシによさそうな『すまいる』じゃのう」

美優「こんどくくくやってみるわくくくく」

部長「おげ！」

ほんじゃま、おとねえちゃん、花菜クンのこと、あとはおねがいのだ。

そゆことで、ていきってーじーなのだ」

花菜「びゅいーんと音をたてながら、はしりさるブチヨーくん」

美優「おかんくホケンしつにかえるわくくく」

珠輝「ワシも、せーと会のキチにかえるとするのじゃ。

まだやることのこつとるでう」

笑魅「えみっ、ぎゅうどんくってくるっ」

花菜「かえっていくみんな」

花菜「『すまいる』をつくりだすかかりになった花菜・・・」

音々「ええこつちゃとおもうで、ボクとしては」

文乃「ウチもそうおもうでー」

花菜「・・・」

学校になれるために、ブチヨークんからもらったこのスカート、かわいいスカートだね」

音々「そのスカート、ブチヨークのきてるヘンなせいふくとおなじ、青のチェックのガラやで」

花菜「え・・・？」

(え、え、え、えええええー！！！！！？)

ホントだ・・・このスカート、いやかもー！！！！！)」

文乃「ななちゃんがうえにきる、はやりのせーふく、しゅげい部にもらいにいこー」

音々「そやな、いこか、なな」

花菜「(このヘンな学校でホントにちゃんとやっていけるのかなー！！！！！！？)

それと、うわぎのせいふくもらってもやっぱこれはくの・・・？)」

はなながきたとき ↓ 花菜がはじめて楽校にきた日 ↓ おしまい

花菜 「いまはジュギョウじかん・・・のはずなんだけど、センセイがこない・・・。

おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたし、の3にんでキョウシツにいます」

笑魅 「とつげきつ、えみちゃんくいーずっ!」

音々 「なんなんやら、いったい。やぶからぼおに」

花菜 「えみちゃんが、キョウシツにはいつてきて、すぐにきいてきた」

文乃 「どしたん?」

笑魅 「えみもすきでっ、いまいちばんにんきのヒーローはっ?」

音々 「しらない」

文乃 「しらない」

花菜 「しらない」

笑魅 「ぶぶーっ!じかんぎれーっ!」

音々 「しつもんから、まだ2びようくらいしか、たってへんがな」

笑魅 「こたえはっ、またらいしゅーっ!」

文乃 「えっ、らいしゅうもあんの?」

笑魅 「つづいてだいにもんっ、えみのとくいな力モクはっ?」

音々 「らいしゅうに、つづくとちゃうんかい」

文乃 「ウチしつとるでー。かていかー」

笑魅 「ぶぶーっ、こたえはチョーリジッシュー!」

音々 「そこは、かていかで、せいかいでええがな」

笑魅 「みんなっ、えみのことっ、わかってなさすぎっ」

音々 「そやけど、ふみのん、さつきせいかいしとったきがするで」

文乃 「そやね、ウチもさつきのは、せいかいがかまへんきがする」

笑魅 「こんどはっ、ミスメガネがつなにかっ、もんだいだしてっ」

文乃 「ウチかー。そやなー。ウチがこのメガネをどこのおみせでかったか、こたえてー」

笑魅 「んなもんっ、わかるかっ」

音々 「それをわかるのは、かなりきついで」

花菜 「ううん・・・」

笑魅 「えみのことっ、もつとくわしくなれっ。あとミスメガネのこともっ」

音々 「むちやいうとるなあ」

文乃 「もつと、おたがいをわかりあえるとえーなー」

音々 「そやなあ、まあ、メガネをどこでかったかは、わかるはずないやろおけどもなあ」

文乃 「あははははー」

笑魅 「わかるかっ、んなもんっ」

花菜 「わたし、えみちゃんのこと、そういえばあんまりくわしくない・・・」

笑魅「えっ、そうなのっトガキっ。」

んじゃっ、トガキやほかのひとにつ、えみのことをもっとわかってもらうのっ、どうすればいいかなっ？なんかつかんがえてっ」

音々「うん、なんかかんがえてほしいわあ」

文乃「ななちゃんー、なんかかんがえてー」

花菜「うーん、いままでのなしのながれでなにか、かんがえてみるね。」

そうだね・・・みんなで・・・けんてい・・・をしてみるといいかな・・・」

音々「けんていで、なん？」

文乃「みんなでかー、どんなかなーどきどきー」

なかまのけんてい ↓ みんなのことのくわしさをこたえあいわかりあう

笑魅「けんていってっなんなのっ？」

文乃「なにかについて、どれくらいくわしかをしけんでしらべて、

くわしいひとには、くわしいっていうシヨウメイをするっていうのやんね」

音々「しけんをうけて、シカクをもらえたりもするらしいなあ。」

みゅーのやりたいしごとの、カンゴシさんなんかも、けんていとはちゃうけど、しけんをうけてシカクをとらなあかんらしいで。

んで、みゅーはカンゴ学校にゆうがくするために、

べんきょうをがんばっとるんやって」

文乃「みゅーちゃん、がんばりややもんねー」

花菜「と、いうわけで、カンゴシさんになりたいとおもってがんばってる、

みゅーちゃんをよんできました」

美優「みんな~~~~、いや~~~~はあ~~~~」

音々「いやは」

文乃「いやっはー」

笑魅「デカイヒトをよんでくんなっ、ぶんぶんっ」

文乃「まーそーいわずー」

花菜「このすまいるは、けんていというより、もんだいのだしあいをすることで、おたがいにくわしくなれるような、そういうすまいるだとおもっ・・・」

音々「んで、なな、そのみんなでもんだいをだしあうようなけんていをするごとと、

えみや、ほかのひとのことにくわしくなれることが、いまひとつつながらへんのやけど、どういうふうにつながるん？」

花菜「そのことをしてもらったために、↓ こんないところ ↑ をまっすいうね。まず、けんていをしてもらったひとが、たかさんのじぶんのことをしてもらえて、うれしくなるとおもうんだ。

たかさんじぶんについてのもんだいにせいかいしてもらったことで、じぶんのことをすぐしってもらえてるとおもえるし、ふせいかいでも、こたえをきいてもらったあと、しってもらえてなかったことをもっとしってもらえるんだ。

えみちゃんのさっきのチョウリジッシュウがとくいということも、こたえをきくことで、よりくわしくなれたとおもうよ」

音々「そやなあ、ボク、えみがチョウリジッシュウがとくいっていうのはじめてきいたんやったわ。そのことでくわしくなれたなあ」

美優「へへへへそうなんやへへへへ。おかんもへへはつみやったでへへへへ。えみちゃんのことへへへへへへへへ、すこしくわしくなれたわへへへへ」

笑魅「ミスメガネがつ、えみのことしてくれてっ、ちよっとうれしかったよっ。

それにほかのひとにつ、えみのことをっ、もっとしってもらえてうれしかったっ」

文乃「そういう、けんていでただしこたえをきくことで、くわしくなるっていうのにやくにたつんや」

花菜「うん、そう・・・」

音々「なるほどなあ」

花菜「じぶんがすきなこと、くわしいことをほかのひとにってもらえるっていうよさもあるし、それと、せいかいしたことのてんすうをくらべあうことで、ちよっとした楽しみにもなるよ。

えみちゃんがきいてた、いまにんきのヒーローのことも、ヒーローがすきなひとどうしで、くわしさをくらべあうとか、しらないところをおしえあえば、もっとおたがいくわしくなれてうれしいんじゃないかな。

それとどっちがくわしいかのきょうそうのたのしさもたのしめるよ」

音々「ふみのんとタヌキでラクゴのけんていをするとなのしそうやね」

文乃「ほんまやねー」

美優「けんていをすることへへ、おたがいをへへ、とかへへへへ、

じぶんたちのくわしいすきなことをへへへへへへふかくしりあうんやねへへへへ」

文乃「そっかー、そういういいところなんやー」

笑魅「なるほどっ」

美優「ひつようなものって〜、どんなもんがあるん〜?」

花菜「↓ こんないるもの ↑ は、もんだいとこたえをかく、かみくだよ。

もんだいは、もんだいをだすひとがだしたもんだいを、こたえるひとがかみにかいて、こたえは、かみのあいたところにかくといいよ。

ことばでもんだいをいつてもいいかな。いろいろくふうしてほしい・・・」

音々「りょおかい。もんだいは、くちでいつでもええんやね。

ほかにもいろいろかんがえてみるわ」

花菜「↓ こんなやりかた ↑ は、

けんていのもんだいを、こたえるひとのそれぞれのかみにかいて、もんだいをといて、あとでこたえあわせするんだ。

てんすうはつけてもつけなくてもいいし、

てんすうのくらべあいも、してもしなくてもいいよ」

笑魅「カンタンだねっ」

音々「わかりあうことがだいじで、

てんすうをくらべあうのは、したいひとだけでってことなん?」

花菜「そうだよ。くらべあうとか、きそいあうとか、

そういうたのしみかたをするというのは、したいひとがすればよくて、ぜったいしなきゃいけないこととはちがうとおもうんだ。

えと、それと、てんすうのよかったひとに、けんていにごうかくしたっていうシヨウメイシヨをつくって、それをあげてもいいかな」

文乃「シヨウメイシヨかー、どんなんあげるとええかなー?」

花菜「てづくりのでもいいし、ほんかくてきなでもいいし、なんでもいいよ。もらったひとがよるこぶものなら、どんなのでもいいとおもう。

これも、ぜったいによいして、あげないといけないものとはちがうかな」

音々「もらったひとがよるこぶっていうのがミソやね」

美優「ちいさいこ〜〜なんか〜、もらうとよるこぶやろ〜〜な〜〜」

美優「ほんじゃ〜、やりかたがわかったことやし、

みんなでやってみよ〜」

笑魅「はやくやりたいっ。とりあえずはやくやりたいしっ、

あたまかすあわせのためだけにつ、バカをよんできたっ」

部長「いやぁーはっはっはっは。はるーなのだ、おとねえちゃん、みなさん」

笑魅「やつほーっ、バカっ」

美優「いやゝゝゝはゝゝゝ、ブチヨゝゝゝゝゝゝくんゝゝゝ」

部長「いやぁー、たいようのひざしのような、

おとねえちゃんからのしせんがまぶしい！」

音々「へー」

美優「あれゝ？タヌくんゝゝゝきてないねゝゝゝ、どしたのゝ？」

部長「いま、アジでふとっばらってて、これないのことなのだよ、みゅーちゃん」

笑魅「アジグセわるいなっ。

まっ、かすさえそろえばどっちでもいいんだけどねっ」

音々「まず、もんだいをだすひとをきめよっか」

部長「ワタクシがやらせていただくのだ」

笑魅「いいよっ」

美優「おかんもゝゝゝ、えゝゝゝゝでゝゝゝゝ」

部長「みなもしゅ、おげ？」

一同「おげ！」

部長「ほんじゃま。わが蒼遥楽校についてのけんてい、蒼遥けんていをするのだ」

笑魅「らじゃっ」

美優「いえゝゝゝゝゝ」

部長「もんだいをワタクシがいうので、こたえをくちでいってほしいのだ。

それと、てんすうをつけないということで、すすめさせていただくのだ。

ではさっそくに。だいーもん、せーと会しつと、そのまわりにしかけられてる、

ワナのかすがだいたいどれくらいなのでしょう？3つからえらんでちよなのだ。

一、10」。

二、50」。

三、100」。

さて、どれなのだ？」

音々「おおめにみつもって、にばんの50くらいやるかなあ」

文乃「ウチ、いちやとおもうわー」

花菜「わたし・・・いचना。

それと、なんで、せーと会しつにワナが・・・？」

笑魅「100コ！ぜったい100コ！」

美優「おかんゝ、なんコかのこたえしってるしゝゝゝ、こたえをいうのをやめとくわゝゝゝ」

音々「なんでこたえをしってるんやるかなあ」

部長「みなさんのこたえがでそろったのでこたえをば。
こたえは、さんばんの100コなのだ！」

音々「おおいっ」

笑魅「えみっ、せいかいっ。おもいっきりカンだけどっ」

美優「それいじょー、せーと会よさんでワナをふやすたびにー、
おかんのてもちのメリケンサックがー、

ひとつづつ、ちぬられていくでー、

部長「によー！？これいじょうちぬりがふえていくのはこまるのねっ！

でで、ではでは、きをとりなおしてつぎのもんだい！

すこしまえの楽校びじんこんてすとで、だれがぐらんぷりだったか？なのだ」

花菜「そして、それから、なんもんかこたえたあと・・・」

部長「つぎが蒼遙けんていのさいごのもんだいなのだ。いま楽校ではやってる、
女子せーとの、ふあっそんをみんなはなんてよんでるのだ？」

花菜「女子のファッション・・・」

音々「てんすうのかせげるもんだいやなあ」

文乃「だれでもしつとるやるーな」

笑魅「ラクシヨーすぎ！」

花菜「・・・しらない・・・」

笑魅「トガキはテンコウセイだよっ、きにすんなっ」

部長「このもんだいのこたえをすること、

わがこうのこともつとくわしくなってもらいたいのだ」

文乃「さすがブチヨークンー、よくかんがえてるね」

音々「きょうはヤリがふるかもな」

美優「おかんもしらんわすれたー」

文乃「みゅーちゃん、しらんのかいっ」

音々「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

文乃「さいほう部にふくをもらいにいくとき、どーゆーてたんやるー」

音々「で、ボクが、ななにこたえをおしえてええ？」

部長「もちろんオゲ！」

音々「もてもてもでるっていうねんで。ななが、いまきてるのもそうやねん。

ちよっとした、いろちがいのふくをまぜてきるのが、はやっとなねんで」

部長「おとねえちゃん、れくちゅあをば、てんきゅ！」

花菜「そうなんだね、しらなかった……。おしえてくれてありがとう。うれしいな」

花菜「つぎは、おとねえちゃんがおとねえけんていをしてくれます」

音々「じぶんのことをけんていにすんの、はずかしいような、たのしみなような」

部長「ワタクシからの、らづがますますふかまりそうな、そんなけんていなのだ」

笑魅「そのらづつ、はきけがするっ」

部長「どんまーい」

美優「なにがどんまーいなんやろー」

音々「おとねえけんていはてんすうせいなんやで。

んで、こたえをかくかみに、もんだいがすでにかかれてるねん。

あとでこたえあわせをして、せいせきのええひとは、

ううん、なにかいいことあるかもなあ

部長「このワタクシに、ぜひおまかせあれっ」

美優「なにがおまかせあれーなんやろー」

音々「сойじや、おとねえけんていはじめ」

花菜「カリカリカリとこたえをかくみんな……。わたしもかう……。」

花菜「しばらくして……。」

音々「みんな、かけた？」

笑魅「がふっ！」

部長「ばっちー！」

美優「もちろんーやでー」

花菜「わからないもんだい、けっこうおおかった……。」

部長「どんまーい、花菜クン」

音々「こたえをこくばんにかいてくわ。ちよつとまってや」

花菜「こたえをみやすいところにかいていくおとねえちゃん」

音々「はっぴようします。まえのこくばんみたってや。

問・よくまちがえられる、なまえのよみかたなあに？

答・『ねね』、とか、『おとおと』。

おとねって、ただしくとよんでくれるひとはけっこうすくない。

んで、このもんだいのばあいは、みぎのどっちでもせいはいです。

問・音々のむかしのあだなは？

答・『雷神』。しってるひと、すくなそう。いまは、おとねえか、ガリベン。

問・しているぶかつ

答・いまのどこ、『とくになし』。べんきようがすきかな。

まえは、ふうきいいんふくいんちようだったんです。

問・せのたかさはどれくらいやる？

答・『150センチとちよいぐざい』で、こまかくはナイシヨ。

まだちゃんとのびてる。もうすこしのびたい。

問・すきなたべものはなんでしょうか？

答・『魚肉団子』。めっちゃすき。つみれともいう。

問・メガネかけてないときにほんとうは目がよくて、

じつはダテメダネをかけてる？このもんだいは、○Xでこたえてね。

答・『X』。ホントに目がわるい。ダテメガネのひと、けっこう楽校におおそう。

て、とこかな。みんなどやった？

笑魅「さっぱりわからなかったつ、もんだいようしにカンジがおおくてっ！」

文乃「そーゆーりゆうかいっ」

部長「どんまーい」

美優「それでさつきくく、がふってゆくてたんやねくくく」

音々「それはあやまらんなあ。ごめんな、えみ」

笑魅「ガリベンっ、どんまーいっ」

文乃「って、まねかいっ」

部長「りぴーたふたーみー」

音々「なんだかここ、ヘンなくうきになっとる」

笑魅「おげっ」

美優「おうげく」

花菜「ほんとにへんなくうきに・・・」

音々「さつきもいうたけども、みんな、なんもんわかったん？」

笑魅「さっぱりっ」

美優「はんぶんくらいわからなかったんやけどくく、こたえをおしえてもらえてくく、

おとねちゃんのこゝろゝゝゝ、よくわかったでゝゝゝ」

音々「ほんまに？うれしいわぁ」

花菜「わたし、わからないことがおあった・・・でも、

おとねちゃんのことがもつとわかって、うれしかった」

音々「そっかぁ。そやけど、わかってもらえて、ボクもうれしいねんで」

笑魅「ミスメガネっ、どうだったっ」

文乃「えへへー、せのたかさいがい、ぜんぶわかったわー」

花菜「すごい」

美優「ほんまゝ」

笑魅「かつこいいっ」

音々「さすが、いちばんながいこと、ボクとのともだち、

しんゆうでいてくれるだけあるわぁ」

文乃「えへ。そやねー、さすが・・・やね」

笑魅「ぐずっ。あついユウジヨウのいいはなしだねっ。なみだがでるっ」

花菜「ところでブチヨークンは、なんてんだったの？」

部長「ワタクシ、まんてんだったのだ」

一同「って、それどうやってしらべたんだ！？」

なかまのけんてい ↓ みんなのここのくわしさをこたえあいわかりあう ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ」

音々「ボクらの楽校は幼小中高大のすべての学校をかかえて、
ようちえんや大学院もちかくにあるんやで」

花菜「そうなんだ・・・」

文乃「ウチらの楽校のちかくに大学院生なんかがおるねんで」

花菜「へえ、そうなんだね・・・えみちゃんて、小学生なの？」

笑魅「グサッ」

花菜「ぐさっ？」

音々「それはいいなさんなって」

花菜「え・・・ちがうの？」

笑魅「しつれいなっ、トガキとトシはかわらないよっ、

この○○○○っ！□□□っ！△△△△っ！」

花菜「そうなんだ・・・」。

諸般の事情により○と□と△で伏せさせて頂きました」

文乃「ななちゃん、あやまったほうがえーでー」

花菜「???」

音々「ななの、なおしていかなあかんとこやなあ」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「やつほーっ。マジマジマジメっ、ジミジミジミキャラ3にんむすめっ。

みじかくいうとっ、マジミっ」

音々「まあ、そやねんけどなあ」

文乃「でも、そのとおりやねー」

花菜「がっくり・・・」

花菜「そして、べつのひ」

音々「えみ、がいこくそだちでエイゴがすこし、はなせるねんで」

花菜「すごい。きかせてほしいな」

笑魅「いいよっ。あいきやすぴーきんにんぐりっ」

花菜「わあ、すごい！いみがよくわからない・・・けど、

はつおんバッチリ！・・・なきがする。なんとなく」

文乃「すごいなー、ウチのカタカナエイゴとぜんぜんちゃうわー」

音々「たつじんやなあ」

笑魅「えっへんっ！えみっ、カンジよりエイゴのほうがとくいなんだよっ」

音々「それやとボクらの国でくろうつするやろなあ」

部長「ワタクシも、がいこくのことばをはなせるのだ」

花菜「うわ、いきなりあらわれたブチョーくん」

音々「まいどのことながら、どこからあらわれるんだか、どこではなしをきいてたんだか」

部長「ではさっそくに、がいこくのことばをば。」

はんだら？ひんだーら。ふんだら！へんだら・・・？ほーんだーらー♪」

花菜「ううん、なにをいってるか、さっぱりわからない・・・」

部長「これはエベレストのユキオトコのあいだでつうじる、スノーチヨモランマンゴなのだ」

音々「つうじるはんい、せまっ」

笑魅「えみもっ、スノーチヨモランマンゴをはなせるよっ」

花菜「え・・・なんで？」

花菜「そして、べつのひ。

えみちゃん、いつもおやつをたべてるね」

笑魅「えみっ、ふとらないタイシツなんだよっ、たべまくりっ」

文乃「そうなん？うらやましーわー」

花菜「ホント、うらやましいな」

文乃「みゅーちゃんは、なにをたべてると、

あんなに、せがたかくて、そのうえほそいままでいられるんやろ」

笑魅「デカイヒトはぜったいつ、うまれつきっ、なにくつてもガリるタイシツっ。

そりやもうガリガリにつ。ガリッッッッッッッッッッッッッッッッガリにつ。

もうすぐやせすぎのビョーキでっ、ぶったおれるっ」

音々「そこまていうか」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「このガッコウのもんはっ、みんなキアイがなまっとるっ」

音々「そのいいかた、ちょっとへんやで、えみ」

花菜「そして、べつのひ」

音々「それにしても、この楽校にはほんまにろくな男がおらんなあ」

笑魅「サスガリュウセイみたいなの、ほんとうのっ、

おとこのなかのおとこがいたらいいのにつ」

花菜「サスガリュウセイ・・・？」

音々「えみのみてるヒーローばんぐみのヒーローのことやで。

カンジでかくと、こう。流星流石ってかくねん」

笑魅「バカやウラバンよりっ、ヒャクオクマンチヨーバイかっこいいっ」

音々「そのすうじのいいかた、おかしいで、えみ」

花菜「男のなかの男ってかんじかた、ちよっとずれてるような・・・」

文乃「ブチヨークン、ドキドキ」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「ねーねーっ、なんでえみってこんなにあたまわるいのっ？」

花菜「う、それは・・・うーん・・・。そういうことをきかれると・・・」

音々「イデンかな。おやごさんはどんなおしごとしてはるん？」

笑魅「おとーさんもおかーさんも、おじーさんもおばーさんも、

そのまえからも、かぞくみんなですとホーリツカンケーとかいうしごとだよっ」

花菜「ホーリツカンケー・・・？」

笑魅「ロースクールとかいうカイシャのメンバーガクキョージュとかいうしごととかっ、

あとコートーサイバンシヨとかいうカイシャのサイバンカンとかいうしごととかっ、

あとホーリツジムシヨとかいうカイシャのベンゴシとかいうしごととかっ、

そういうホーリツカンケーとかいうしごとらしいよっ」

一同「ス・・・スーパーエリートのちすじかーーーー！！」

それなら、なんでこんなこともできたんだ・・・？」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「はやいとこっ、セイトカイチヨウのバカがジシヨクしてくんないかなっ

そうすればっ、えみがセイトカイチヨウになれるのにつ。

もちろんっヒマつぶしのためにっ」

音々「イス、ねらっとったんかい。あと、しよせんひまつぶしのためかい」

花菜「そして、べつのひ」

花菜「いま楽校ではやってる、ダテメガネをかけようとおもってるんだけど、どうかな？」
音々「そうなんや、みんなとおなじになって、ええとおもうで」

美優「ななちゃ〜ん〜。かわい〜のがおいてるおみせ〜、
こんどおかんといっしょにいこや〜」

花菜「うん、わたしでよければ・・・。えみちゃんは、どうしてメガネかけないの？」

笑魅「えみっ、エンシのせいでちかくのものがみえないんだよ。」

それにつ、エンシのようなメガネかけても、ちかくのがちゃんとみえないんだよ、
マンガのほかのホンをよまないのもっ、それでっ」

花菜「みんな、しーん・・・としずまりかえる・・・。」

えみちゃん、ゴメン・・・。

おかしなことをきいて、ほんとうにゴメンなさい・・・。」

笑魅「セイトカイチヨウのバカのいいかたをまねしてゆうとっ、

トガキっ！おげっ！どんまいっ！だよっ。

えみっ、きにしてないからっ、トガキもきにすんなっ」

花菜「えみちゃん、ちゃんと本をよめてれば、かしこかったのかも・・・。」

花菜「いまはじゅぎょうのあいだのやすみじかん。じゅぎょうにでるのは、おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたしたちの3にんくらい・・・」

文乃「ななちゃん、かいせつありがとー」

音々「ありがとおな、なな。あと、ふみのん、はい、かいてきたで」

文乃「ありがと、おとねえ。あしたまたかえすわー」

花菜「なにをわたしてるの・・・？」

音々「日記の本。ボクとふみのんのふたりで、こうかん日記してるんやで」

花菜「へえ、いいな」

文乃「ななちゃん、ウチとこうかん日記せーへんかー？」

音々「ボクとも、しよやあ」

花菜「うん、しよ・・・」

文乃「日記がたぐさんにふえることになるねー」

音々「日記を3人でバラバラにすんの、けっこうたいへんやるおなあ」

花菜「たぐさんのひとと、いっしょにたのしめるような日記がほしくなる・・・」

文乃「そやねー、たぐさんのひとと、なかよくこうかん日記できるとええやるな」

音々「なな、みんなでできるような、そういうすまいるかんがえてくれへんか？」

花菜「そうだね・・・、うーん。いま、かんがえたんだけど・・・、

みんなでこうかん日記をするといいかな・・・」

文乃「なににー、きかせてー」

音々「どんななんかな、どんなすまいるなことか、たのしみやわあ」

みんなでのにつき ↓ 日記のへんじをみんなでかきあいたのしくなる

文乃「で、どんなすまいなんー？」

花菜「↓ こんすまいる ↑ っていうのをまず、いうね。

どんなのかっていうと・・・、

いつもはひとりでかく日記や、ふたりでするこうかん日記を、

もっとたぐさんのみんなでかきあうと楽しいかなっておもうんだ。

それと、日記としてつかうだけとちがって、

日記にかいたことばにたいしてのへんじを、みんなでかきあうっていう、

こうりゅうのための本としてのつかいかたもできるっていうすまいるなんだ。

それと、ほかのつかいかたで、つたえたいことをしってもらうための、

れんらくするための本としてもつかうと楽しくて、

やくにたつとおもうんだけど、どうかな・・・」

文乃「たくさんで日記をこうかんするなら、ななちゃんもウチらといっしょできて、すごいええとおもうでー。ほかのひともいっしょにやってええん？」

花菜「うん、なんにんでもいいよ。えみちゃん、みゅーちゃんも、

いっしょにすると楽しいとおもう。もっとたくさんでしても楽しいかも」

文乃「日記に書いたことを、こうりゅうのためにみんなでへんじするっていうのが、いままでの日記とちゃうかんじやねー」

音々「つたえたいことをしつてもらうための、れんらくするための本、
っていうんは、どんななん？」

花菜「日記としてのほかに、つたえたいことをつたえるために

本にいろいろできごとをかくと楽しいし、ペンリだとおもって・・・。
きょうしつにおいてある、がっきゅう日誌みたいなものかな。」

音々「そっかあ、れんらくちょうや、カベにかけてあるれんらくばんにちかい、
そういうのに、よくにたつかいかたやね」

花菜「うん、そんなかんじだよ。日記というよりは、でんごんばんにちかいかな。

めだつところに日記の本をおいておいて、みんながしつておいたほうがいいことを、
みんながかきたいときかいて、みんなでそれをみて、
しつておいたほうがいいことをしつておくことができるっていうものなんだ」

花菜「↓ こんないいところ ↑ のことなんだけど・・・。

このすまいるのいちばんいいところは、つたえたいことやヒミツなんかを、
みんなでいっしょにもちあうことで、いっしょに日記をかいてるみんなが
みんなは、なかまだというきもちをつよくできるところかなっておもうんだ。

いっしょにかいてるひとたちのみんなからのへんじをもらえるっていう、
たくさんからこたえがかえってきつてうれしいというよさもあるんだ。

それと、かきおわった本をのこしておいて、何年かたってからよみかえすことでの、
おもいでがたくさんつまった、日記のたからものとしてのよさっていう、

そういうよさがうまれるのもいいところになっておもう。

それと、日記に、絵をかくとか・・・シャシンをはりつけてもいいとおもうよ。

笑魅「そのはなしっ、ききずてならんっ」

音々「えみ、きいとったんか」

文乃「つて、なんでとうじょうしかたがジダイゲキっぱいねんっ」

笑魅「なんだかたのしそうっ、えみもまぜてっ」

文乃「えみちゃんもいっしょにしょー。たくさんひとで日記をこうかんするなんて、にぎやかで楽しそうやねー」

音々「絵やシャシンをはりつけると、ふつうの日記のわくをこえられて、楽しいやろなあ。つたえたいこと、ヒミツをもちあうって楽しさは、

こうかん日記っぽくて、どういう楽しみかだいたいそうぞうがつくわ」

笑魅「えみつ、こうかんニッキっ、したことないっ。どんなたのしさなのっ？」

花菜「ナイシヨばなしみたいなのかな。

なかよしどうしの、みんなのなかだけのはなしっていう、

なかよしどうしの、なかよしなきもちをかんじられるとおもう」

笑魅「それならっ、なんとなくわかるっ」

音々「たくさんへんじがかえってくるっていうのがええなあ。

んで、かきおわたあとの、おもいでがたくさんつまった本になるんかあ」

文乃「いっしょうのおもいで、たからものになるやんねー」

花菜「↓ こんないるもの ↑ は、ええと、それと・・・。

つかうものは日記をかく本だけだよ。

おうちでも学校でも、なかよしがいるところなら、楽しめるかっておもうんだ」
文乃「それなら、やりやすいやねー」

花菜「いっしょに楽しむひとにんずうは・・・5、6にんくらいまでかな。

ふつうのこうかん日記とおなじように、ふたりくらいでしても楽しい・・・」

音々「ふたりよりたくさんなら、そこそおおいかずまで、いっしょにできるんやね」

笑魅「フツのこうかんニッキよりっ、たくさんひとでたのしめるねっ」

音々「日記につかう本は、さっきまで、ふみのんとボクがつこた日記の本でええん？」

花菜「うん、かける本ならなんでもいいよ。ふたりが、かいてたつづきからかいてもいいよ」

花菜「↓ こんなやりかた ↑ っていうのをいうね。

いっしょに楽しむみんなで、こうかんしあいながら本にいろいろかいていくんだ。

ここはふつうのこうかん日記とおなじだとおもう。

えっと・・・それで、かいたあとに、つぎのひとにわたすまでのじかんは、

ながくてもみじかくてもよくて、

かいてすぐでも、かいた1時間あとも、つぎの日でも1週間あともいいし、

つぎのひとが、まわしてっていうまえならいつでもいいとおもう」

笑魅「えみみたくないかげんなひとでもっ、たのしめるねっ」

音々「じぶんでいいかげんっていうか」

花菜「それと ↓ だいじなところ ↑ で、ただ日記やつたえたいことをかくだけでなく、ほかのひとがかいたことへの、

へんじやツツコミや、ちゃちゃいれもかくのが楽しいよ。

そうすることで、たくさんのひとで日記をかくことの楽しさが、

もっと、かけざんみたいに、たくさんに、ふえていくかなっておもってるんだ。

ここが、みんなで楽しむことのいちばんのいいところなんだ。

こうすることで、みんなでいっしょにいるかんじが楽しめるとおもう。

もじだけとちがって、きょうしたことや、かんじたことをわかりやすくするための、
絵やシャシンをはつてもいいし・・・それと、らくがきしても楽しいとおもうよ」

音々「ツツコミかぁ。ふみのんではんやねえ」

文乃「えへえへー。そーゆーおとねえこそー」

笑魅「やつほーっ、ツツコミジミキャラふたりぐみっ」

音々「またへんなあだなが、うまれとるなあ」

花菜「つつこまれると、うれしいよね。」

それと、じぶんがかいたことに、3にんとか4にんからの、

たくさんへのんじやかんそうがかえってくると、すごくうれしいんじゃないかな」

文乃「かえってくるへんじがおおいと、うれしーやんねー」

音々「ボクがいつもやってるこうかん日記で、ふみのんからへんじがかえってきて

すぐうれしいなっておもうわぁ。それがたくさんからやねんから、

もつとうれしいやるなあ」

花菜「うん、そうだとおもう・・・。えと、それで、こうかんしてかくだけとちがって、
本をつくえのうえにおきっぱなしにするとか、こう、本を力ベにヒモでつるして、
みんながかきたいときにかきたいことをかくということにするのも楽しいよ。

そのときはいっしょに日記をかいてるひととちがうひともみることができるといいう、
そういうことをかんがえてかくといいとおもうよ。

このおきっぱなしにするっていうの楽しみかたは、

さっき、おとねちゃんもいってた、日記というより、

がつきゅう日誌や、れんらくちょうや、れんらくばんにちかい楽しさかな。

それから・・・ふつうの日記のようについさいきんのことをかくだけとちがって、
だいふまえにしたことやかんじたことをかいても楽しい・・・」

音々「きのうときょうだけとちごて、むかしにさかのぼって、むかしのことをかくんかぁ。

いまだけのことをかくより、ひるがりができそうやね」

文乃「おきっぱなしにするのは、ふーきーん会のへやに本をおいておいて、

みんなでかいてまわしよみして、つたえたいことをおたがいわかりあう

っていうのに、つかえそー。ひつようなことだけとちごて、それといっしょに、楽しいことやジョーダンもたがいにかきあうこともできそーやねー」

花菜「うん。ひつようなこととちがうこともかくのも楽しいかな」

笑魅「おいておくのはっ、どこにおいておくといいのっ?」

音々「いま、きょうしつににいることやし、きょうしつのどこにおくかやなあ。

カベにつりさげておくとか、きょうしつのすみっこにおいてくとよさそうやね」

文乃「おいておくすまいると、こうかんするすまいるって、

日記にかくことはどっちも、だいたいおなじなんやんねー?」

花菜「おいておくのは、たくさんひとがみることになるし、

それにふさわしいことをかくといいとおもうよ。

ナイシヨのはなしはしないほうがいいかな。でも、たくさんひとにかいてもらえて、そのことでのたのしさがたくさんあるとおもうよ。

手でわたしてこうかんする日記は、じぶんたちだけの日記になるから、みんなでヒミツとかナイシヨのこととか、こっそりつたえたいことなんかをかくといいかな。ほかにみえるかんがえてみてほしい・・・」

笑魅「こうかんするニツキとっ、おいとくニツキかつ。どっちもちがうんだっ」

花菜「うん・・・」

音々「ほなそういうことで」

笑魅「さっそくやろっ。えみからかかせてっ」

音々「ほい」

花菜「えみちゃんに日記の本をわたす、おとねえちゃん」

笑魅「えみっ、ジがきたないけどっ、ゆるしてなっ」

部長「どんまい」

花菜「わっ、びっくりしたっ。いきなりあらわれたブチョーくん」

部長「いやぁーはっはっはっは。ワタクシも、さんかをばさせていただくのだ」

珠輝「いやっはあ。ワシもよろしいですか?」

花菜「タヌキくんもやってきた」

音々「ずいぶんつごうよくでてきたな。まあ、これで6にんになったわ」

笑魅「じゃっ、かいてくっ。

『きょうたべたタコヤキに、たこがはいってなくて

せいとかいちよおのばかにやつあたりした』

・・・とっ。これでいいっ?」

珠輝「フデでへんじをかかせていただきますわい。」

『おもいきりやつあたりじゃのお。ブチヨーもさいなんじゃな。』

・・・ふむ、われながらタツピツ」

文乃「タヌキくん、フデがうまいんやねー」

音々「やるなあ」

珠輝「ふおっふおっふお、かくれたとくぎじゃわい」

部長「それでは、ワタクシも、おとねえちゃんの、おうつくしいにがおえをば、かきかき。それと、タコヤキにタコのかわりにはいつていたコンニャクだけを、ワタクシが、やつあたりでたべさせられたときのシャシンをはっておくのだ、ぺたぺた」

花菜「『ブチヨークン、そのシャシン、

どうやつてとつたのか、あとでおしえてください』」

音々「ボクもへんじをかくわ。」

文乃「『メロンパンにメロンがはいってなかったときも、ぜひやつあたりしてね。』」
「へんじにたいしてのツツコミかいていい？」

『って、メロンパンにはフツ、メロンは、はいつとらへんがなっ！』

笑魅「あははははははっ！たしかにメロンはフツはいつてないねっ、メロンパンっ。

『トガキつ、たのしいすまいるだねっ』

花菜「よかった、楽しんでもらえて・・・」

音々「『なな、ほかになんかかいてや』」

花菜「『そうかな。じゃ・・・』」

『きょう、すまいるをみんなに楽しんでもらえてうれしかった。

またなにかおもいついたとき、それをみんなで楽しんでもらいたいです。』」

笑魅「『うわ、とがきつて、まじめ。』」

珠輝「『そういうところが、ななちゃんの、めんこいとこじゃとおもいますわい。』」

文乃「『そやね、タヌキくんのいうとおりだよ』」

若草「『ほんまにウチらがなかよしやっていうきもちになれたわ。

なな、いいすまいるをありがとうな。』」

部長「いまはみんなであつまってかいているのだ。

でも、楽校のジュギヨウのあいまのやすみじかんごとに、

ひとりずつまわしていても、きっと、いまみたいに楽しい日記になるのだ。

1日に1かい、日記をかくためにあつまるとか、

1日にひとりずつかいていって、ゆっくりまわすのでも、楽しくなるのだ」

音々「ボクとふみのんで、いままで日記をこうかんしてたからわかるんやけど、

かきつくしたあとの日記の本って、たしかにだいじな、たからものやつておもうわ」

珠輝「『そういえば、ワシも、まえに日記をひとりでかいておって、

そのかきおわった日記はいまでもだいじにしまっておるわい」

部長「日記の本は1さつだけしかのこせなくて、かきおえたあと、

その1さつを、かいたひとたちぜんいんがもつことはできないかもしれないのだ。

でも、いつか同窓会のときにもってきて、みんなで日記のことばやシャシンをみたり、ほかに、卒業の日になにかにそのだいじな1さつをあずけて、

そのひとりのひとにあとをたくすということは、

それにはとてもいみがあることだとおもうのだ」

笑魅「それじゃっ、バカがガリベンをラヴなことっ、ニッキにかいちやおっかなっ」

部長「いやあーっはっはっは。そんなナイシヨのこといわれっちゃって、

もうてれちゃうなあーっはっはっは」

音々「へー」

珠輝「それ、バレバレじゃぞ」

みんなでのにつき ↓ 日記のへんじをみんなでかきあいたのしくなる ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「デカイヒトはっ、キオクリヨクがわるすぎっ」

音々「みゅーって、3ふんまえにおぼえたことをわすれるほど、
ジュートクな、てんねんなんやで」

美優「へ〜〜そ〜〜なんや〜〜」

文乃「たにんごとかいっ」

美優「あははははは〜〜〜へ〜そ〜なんや〜」

音々「いまいうたこと、みゅーに3じかんまえにもいうたで」

美優「そやっ たっ け〜〜〜?」

音々「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

花菜「わすれそうだね、インスタントのたべものをつくってること・・・」

花菜「そして、べつのひ」

音々「みゅーな、ああみえて、ベンきょうのせいせきが、まんなかくらいやねんで」

花菜「がんばりやなんだね・・・」

花菜「そして、べつのひ」

音々「みゅーってな、ホケンしつからあふれそうなくらい、

みゅーめあてで、ホケンしつに男子せーとがあつまってくるような、
そういうにんきのたかいコやねんで」

花菜「すごいにんきだね」

文乃「おんなのコのファンもおおくてうらやましーわー」

笑魅「デカイヒトよりっ！ えみのほうがっ！ ぜったいにっ！ かわいいのにっ！
ぷんぷんっ！ ぷんぷんぷんぷんっ！ ぷんぷんぷんぷんぷんぷんっ！」

文乃「みゅーちゃん、バレンタインに、ほんめいチョコをたくさんもらうんやってー」

花菜「え・・・それ、どういっこと・・・?」

花菜「いまから、じゅぎょうで音楽しつにいくために、

マジミの3にんで楽校のなかをあるいています」

文乃「ななちゃん、かいせつありがとうやでー。

きょうはどんなじゅぎょうなんやるなー」

音々「フエでも、ふくんとちゃうかあ」

花菜「といいながら音楽しつにいくと・・・うつ、なに？このすごい音・・・。

音楽しつのなかにはいる、わたしたち。なかにタヌキくんたちがいます」

音々「いやは、タヌキ。みんなできあがっとなのか？」

珠輝「いやっはあ、おとねえちゃん。そうじゃぞおい、モリのまっさいちゅうじゃ」

花菜「モリって・・・？」

音々「鰯盛のことやで。音楽しつで、どんちゃんさわぎしとったみたいやな」

花菜「???・・・アジモリ・・・？」

珠輝「いやあ、ふとっばらった、ふとっばらった。

マジミ3人むすめのみんなも、鰯でもいっばい、いかがかの？」

文乃「このおはなしは、よいこもよむもんやから、うーん、鰯はちょっと・・・」

花菜「ふとっばらった・・・？」

音々「そのことばのいみはなあ、なながオトナになればわかるねんで」

花菜「ぜんぜんわからない・・・」

珠輝「ななちゃん、うぶなところかわいのお」

音々「タヌキ、そのへんにしとき。かなりこまってるで」

花菜「・・・」

珠輝「ふおっふおっふおっふおっふおっふお」

文乃「かなりできあがってるみたいやねー」

音々「モリにつきものなことやな、そのてのはなしは。

なな、ごめん、いまのはきかんかったことにしたってや」

珠輝「それで、いまからみんなで歌まつりでもせんかな？」

文乃「うーん、それが、きょうは、たいいくかのほうで

歌まつりのどうぐをつかってて、歌まつりができひんのやわ。ざんねんやんなー」

珠輝「そうかのほ。じゃんねんじゃわひい」

音々「タヌキ、したがまわっとらんで」

珠輝「ふおふおふお」

笑魅「トガキっ、なんかいいすまいるっ、ないっ？」

音々「えみ、おったんかいなあ」

笑魅「モリしてっけどっ、コーシーグーヌーばっかのんでたっ」

文乃「そやなー、ななちゃん、すまいるでいいの、あらへんかなー？」

どうぐはあらへんけど、ウチも歌いたいねんー」

花菜「そうだね・・・なら・・・うん。」

みじかいうたかい・・・かな。うん、そういうのがいいかな・・・」

一同「・・・ドキドキ・・・」

みじかいうたかい ↓ みじかい歌を歌ってなかよしでもりあがる

珠輝「かたんにいうと、どんなすまいるなんかの？」

花菜「歌を歌うときに、みじかい歌を音楽をながずに歌うっていう、

↓ こんなすまいる ↑ なんだ。

てがるでかたんんで、ちよっとしたひまつぶしにも、

じっくりみんなでたのしむのものにもつかえるとおもう・・・」

音々「アカペラでってことやね」

笑魅「アカペラってっ？」

音々「ピアノとかギターとか、そういうののおんがくをかけへんで歌だけ歌うっていう、

そういう音楽の歌いかたのことやで」

笑魅「なるっ」

文乃「ななちゃんのいう、みじかいうたかいの、みじかい、のほうは、

どういいうみなんー？」

花菜「歌をはじめからおわりまで歌うより、みじかく歌うほうがもっといいっていう、

そういうわけがあつて、みじかくうたうっていういみなんだ。

えと、どういいうことかっていうと・・・。

アカペラでながいあいだ歌うのがたいへんっていうのが、ひとつのりゆうで、

そうならないためと・・・。それと、もうひとつのりゆうは、

アカペラで歌うときは、歌をサビのところだけとか、1ばんだけ歌うとか、

そっちのほうで歌いやすいっていう、

そういういいところがあるっていうのが、もうひとつのりゆうなんだ。

そういういいところがあつて、みじかく歌うほうがいいかなって・・・」

珠輝「みじかいほうが、スピーカーをつかわないときにはかえっていいんじゃない？」

花菜「・・・うん、そういうこと・・・」。

ほかに、みじかくすることで、いいことがほかにもあるかな」

笑魅「そのっ、ほかにもあるいいところっ、おしえてほしいなっ」

花菜「うん、そうだね・・・。」 ↓ こんないところ ↑ は、

まず、スピーカーなんかの、どうぐや、きかいがいらないうことだよ。

そのおかげで、アカペラですむんだ。

あと、みじかくうたうことで、みんな楽しんで、みじかいじかんでできるよ。

それと、まわりのひとのめいわくにならないなら、

どこでもできるっていう、てがるなところもいいとこなんだ。

ちよつと歌うだけだから、歌はうまくてもヘタでもいいとおもう。

歌いたい歌のサビなんかの、歌いたいところをすこししってるだけで

歌いたい歌を歌えるっていうのもいいとこな。

あとは・・・、歌がみじかいぶん、すぐにかわれて、かわりばんこで歌いやすいんだ。

それで、いちばんいいところは、

みんなでいっしょにわいわいと楽しいじかんをすごせるっていうとこな

文乃「いろんなえーとこが、あんねんなー」

花菜「それと・・・、↓ こんないるもの ↑ は、しずかなところくらいかな」

音々「ほかのひとのめいわくにならんとこ、ってことやね」

珠輝「どういうたのしみかたか、は、おしえてもらえるかのう？」

花菜「えと、↓ こんなりかた ↑ はっていうと・・・。」

歌いたい歌の歌いたいところだけを歌うといいよ。サビだけでもいいかな。

歌ってもひとのめいわくにならないところで歌うっていうのがだいじなんだ。

歌うのがはずかしいひとには、ほかのひとといっしょに歌ってもらって、

はずかしさをかるくしてあげるといいとおもうよ。

それとか・・・、くじびきであたったひとが歌うとか、

みんなでじゅんばんに歌うとかすれば、そのばにいる

いっしょに楽しんでるひとたちみんなでかわるがわる歌えるて楽しいとおもうよ。

つぎに歌いたいひとをきいて、その人に歌ってもらうというのもいいとおもう。

自分でそのばでかんがえたみじかい歌を歌うっていう・・・、

・・・ソッキョウっていうのかな。そういうのもみじかい歌だからできて、

そうやって楽しめるとおもうよ。

歌う歌のながさはみじかくても、あるていどながくても、

かなりながくても、ぜんぶ歌ってもいいかな。

歌のうまさのくらべあいをするとか、

みんなに、歌った歌のうまさをきいて、どっちがうまいかをきめるのもいいな。歌わずに・・・好きな歌のかしだけを、ことばではなしてもいいとおもうよ。詩をことばではなすような、そういうのをしてもいいとおもう。

すきな詩やハイクや、すきなことばを、そのばでメロディーをおもいついて、そのばでメロディーをつけて歌うのも楽しいんじゃないかなっておもって、それともじかいからできることなんだ。ハイクや詩はだいたいみじかったはず。それと、↓ だいじなところ ↑ は、

みじかく歌うっていうことで、みじかく歌うあいだにきもちをつよくこめて歌えるっていうところだよ。そういうのがたのしいかなっておもった。

サビのほんのすこしのあいだとか、いちばん歌いたいところを、

ちからとココロをグツとこめて歌うと、みじかく歌うことだからできる、きもちのこもった、楽しさがでてくるのとちがうかな・・・どうか・・・？

笑魅 「みじかくうたうことだからこそつ、みじかさすべてをこめるんだねつ。

あついつ、うたかいになりそうだなつ」

文乃 「と、いうわけでー。さつそくいこかー」

笑魅 「うたうぞつ、いえいつ」

花菜 「みんなで楽しもうということで、みゅーちゃんとブチヨークンをよんできました」

珠輝 「楽しむひとは、おおいほうがいいぞな」

美優 「いや~~~~~は~~~~。よんでくれてありがと~~~~な~~~~」

部長 「いやぁーはっはっはっはっは。めないへるぴゅー？」

笑魅 「めないなんとかってつ、バカがなにいつてるかつ、さっぱりわからないよつ。

まあっ、ガレキもイマのにぎわいつ」

花菜 「ガレキ・・・？」

音々 「えみもブチヨークも、なにいうとんのか、おもいつきりわからへんで。

そんで、だれから歌うん？」

笑魅 「えみつ、えみからつ、もちろんえみからつ」

珠輝 「えみちゃん、ワシとデュエットせんかの？」

笑魅 「いいよつ、じゃつ、『流星戦記シューティングスターダストマン』の、

オーピングをうたおっかつ」

音々 「いきなりすごい歌を歌うんやなあ」

珠輝 「わかったわいな。サビを歌おうかの？」

笑魅 「うんっ」

音々「タヌキ、その歌しつとんのかいな」

二人「さっそく・・・イチ、ニ、サン、はい！」

せえええええイギのツううううううううううルギでええええええ！！！！！！

はびこるアクを——きる！きる！きる！

「リューサーセンキー……ッ！ シューティングスターツ！ スターツ！ スターツ！ スターマあああああぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁん！！！」

文乃「いえ――！」

花菜「バツチリ、ハモってたね」

音々「きもち、こもつとつたなあ」

部長「アイがつたわってきたのだっ」

「ピリピリくる〜」

笑魅「おもいっきりさけんでっ、スツキリしたっ！」

珠輝「ヒーローの歌は、歌うとスッキリするのぉ」

文乃「つぎ、ウチに歌わしてー」

音々「ふみのんが歌うんかいな。」

みんなにいうとくけど、ここにマイクはあらへんにせよ、

ふみのんはマイクをもつとはなさんひとやで」

文乃「え、そー？」

音々「まえにボクとふみのんで歌を歌いにいったときに、

ボクが1曲、歌うあいだに、10曲くらい歌った」

花菜「え……ホント……?」

文乃「ほんじゃいくわー」

笑魅「だれかつ、ミスメガネをとめろっ！」

文乃「ぎづいてほしーいーこのおもーいー♪(ちらっ)」「

花菜「いま、ふみのんちゃんがブチヨークんをすこしみたような……」

花菜 「そのあとしばらく……20ぶんくらい、

ふみのんちゃんのひとりぶたいがつづきましたことをほづこくさせてもらいます。

それと、そのあいだのことはともながないのでしようりやくします」

文乃「あーたのしかったー」

笑魅 「うまいけどっうるさいっ、んでっ、ひとりでうたいすぎっ」

音々「ふみのんは、歌はうまいんやけどなあ、このもおれつな歌いつぷりはなあ」

部長「さいでは、おつぎはワタクシが……。

おはなのふたりぐみ、の歌をば、
 こころをこめて歌わせていただくのだ。

うたのだいめいは、このあい、とどく日まで」

みじかうたかい

↓

みじかい歌を歌ってなかよしでもりあがる

↓

おしまい

花菜「そして、べつのひ。」

ブチヨーもでるふおーがーるのスカート、すごくはずかしい・・・」

音々「なら、はかときいや、みんなといっしょのにしいひんの？」

花菜「ブチヨーくんにせっかくもらったんだし・・・」

音々「ギリがたいなあ」

文乃「そのスカート、うらやましー」

花菜「えっ」

音々「マジでっ」

二人「シヨーキかつ?!」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「ひまだなっ。セイギのヒーローでもあらわれてっ、

テレビのヒーロードラマみたいにつ、セイトカイチヨウのバ力をつ、

ほうむってくれないかなっ。ヒマつぶしとしてっ」

珠輝「ムチャいうとるのう」

文乃「えみちゃん、それってー」

美優「よんだ〜?」

音々「そおか、みゅーにたのむって、てがあったわ」

文乃「おとねえと、えみちゃん、みゅーちゃんに、戦・慄っ!」

花菜「そして、べつのひ」

文乃「ウチとおとねえでコンビをくめば、まちがいなく、うれる」

笑魅「シヨーバイでもっすんのっ?」

花菜「なんのこと・・・?」

音々「ふみのんがボクをヨメにもらうんか?」

文乃「てんねんのみゅーちゃんがくわってのトリオでも、うれる」

花菜「歌でも歌うの・・・?」

笑魅「デカイヒトのっ、うたのへたさっ、しってるっ?」

音々「どゆこっちゃ?」

花菜「ただいま、楽校のじゅぎょうちゅうです。まじめにべんきょうしないと・・・」

文乃「ななちゃん、いっつもかいせつありがとー」

音々「べんきょうをがんばりたいねん。でもなあ、そとがなあ」

花菜「きょうしつのまどのそとから、ワンワンとかニヤーとかヒーンっていう、どうぶつのなきごえがします。すごくおおきな音・・・」

音々「なんぞか、やっとなのやる」

花菜「そして、じゅぎょうがおわってやすみじかんになりました」

文乃「なにごとをやっとなのか、みにいこやー」

音々「そやな、いこかあ」

花菜「で、みんなで、うんどうじょうまでやってきました」

部長「いやぁーっはっはっはっはっはっはっは。」

音々「おとねえちゃん、みなさん、よくぞみにきてくだすったのだ」

音々「なにやっとなの？」

部長「しいく部のみなさんのあいであ、しいく部いがいの楽校のみなさんの、かってらっしゃるペットの、大みせあい会をやっておりもうしたのだ」

音々「なんやそら」

笑魅「えみのネコっ、えみのネコっ。ずるずるっ」

花菜「あ・・・かわいい・・・」

笑魅「そだよねっ、すっごいかわいいっ。ずずっ」

文乃「かわいいー」

笑魅「ホントはえみのかってるネコちゃんとちがうんだけどっ、ほかのひとにかしてもらってっ、さわらせてもらってっ」

音々「かわいいなあ。こねこちゃんなんやね」

花菜「ずるずる、とか、ずずっ、ってなんのおとだる・・・？」

笑魅「ぶへっくしっ！えみっ、ネコずきなのにネコアレルギーなんだよっ。ずるずるっとかっ、ずずっはっ、そのおとっ」

文乃「えっ、それはついてへんなー。はなー、だいじょーぶー？」

花菜「それでずるずるいつてたんだね・・・かわいいそう」

音々「めちやめちやきついなあ。からだはうけつけへんとは、ううん」

笑魅「でもっ、ネコをかったときにっ、なまえをコネコにしたいっていうくらいすきっ」

音々「ごっつい、ややこしいなまえのつけかたやな」

部長「ちなみにですと、しいく部のみなさんのかってらっしゃる、ウマ、ヘビ、カエルなんかもらっしやるのだ」

笑魅「いらんっ」

部長「ウマはもちろん、キョーギ用のばじつ部のしくごやから、つれてきたウマなのだ。
のることもできますので、よければ、ぜひなのだ」

音々「ウマはともかく、ウマいがいの、ハチュールイ、リヨースールイはなあ」

文乃「もうすぐ、やすみじかんがおわるよ、そろそろかえるっか」

音々「せやな、ほな、ボクらはきょうしつにかえるわ」

部長「いやあーもつたいない、チンジューがまだまだこれからやってくるというのに！」

音々「えんりよしとく」

文乃「ちんじゅうはちよつと」

花菜「ゲテモノ・・・？」

笑魅「ネコいがいつ、いらんっ」

音々「そゆことで、ほなかえるわあ」

花菜「で、みんなできようしつへと、かえっていつているところですよ」

文乃「あとでウマにのりにいきたいわー」

笑魅「ネコっ、めつつつつつつちやつ、かわいかったっ」

花菜「・・・うん」

音々「せやね」

笑魅「あとでまたっ、あいに行きたいっ」

文乃「みんなでペットをみせあうようない、そういうすまいるがあればいいねー」

音々「うん、そやな。なな、なんか、かんがえてくれへんか、そういうすまいる」

笑魅「ペットちゃんたちとちがってもっ、いいよっ」

花菜「じゃあ・・・もちよって、あつまる・・・なんかいいかな・・・」

音々「どんななんかなあ」

笑魅「たのしみっ」

文乃「もちよるんかい、ときどきー」

もちよりあつまり ↓ みんなであつまりもちよったものでたのしむ

音々「どんなすまいるか、だいたいはさっしがつくねんけど、じっさいどんななん？」

花菜「そうだね、いろいろなものをもってあつまって、

いっしょにみたりきいたりたべたりあそんだりする・・・っていう、

そういう ↓ こんなすまいる ↑ なんだよ」

笑魅「たべたりあそんだりもするのっ？」

花菜「うん。そのことはあとでいうね、もうちょっとまってね」

文乃「もちよるのは、ペットちゃんだけとちゃうんやねー」

花菜「うん・・・」

花菜「↓ こんないいところ ↑ は、みんなであつまってワイワイするたのしきかな。

それと、じぶんのもってない、ほかのひとのもってるものでたのしめるところも。

ほかのみんなのもっているすきなものをつかって、

じぶんがもっていなくてしらなかったものをたのしめて、

じぶんのしってるたのしいことのはばがひろがるんだ。

ほかの人のすきなことをしれるっていう、わかりあうよさもあるよ」

音々「ほかのひとの、しらなかったことをしるんやね」

文乃「じぶんのだのしさのはばがひろがるっていうの、えーねー」

笑魅「たくさんっ、いろんなものでたのしめるねっ」

笑魅「たべたりあそんだりするためにつ、

どんなものもちよるのかっ、そろそろおしえてっ」

花菜「いうのがおくてごめん。 ↓ こんないるもの ↑ は・・・、

おかしやくだものなんかのたべものや、ふく、アクセサリー、あそびどうぐ、

おながくのきけるもの、マンガ、おもいでのレストラン、ほかにもなんでもいいよ。

いっしょにいるひとがたのしいとおもえるものならなんでもいいかな。

笑魅「いろいろもちよるんだねっ」

花菜「うん、そうなんだ。ほかにも、いろいろかんがえてほしい・・・」

音々「さっきうんどうじょうでやってた、

おうちでかつてるペットのもちよりなんかでもやさそうやね」

文乃「どんなたのしみかたか、おしえてもらっていいー？」

音々「うん、ボクもききたい」

花菜「↓ こんなやりかた ↑ はっていうと、

いろいろなものを、もちよってあつまってたのしむんだ。

もちよったものをみんなでこうかんしたり、わけあったり、

いっしょにひとつのものでたのしむっていうことをするんだ。

だれかのもってきたマンガをみせてもらってみんなでよむとか、

じっかからおくってきたくだものをみんなでたべるとか、

アクセサリーのこうかんとか、かしかりとか、

いっしょにだれかの好きな音楽をきくとか、

・・・ほかにもたくさん、かんがえられるよ。

おうちでかってる、ペットのワンちゃんとかネコちゃんをつれてきて、みんなでかわいがるのもたのしいとおもうよ。

もちよったものをみんなでいっしょにたのしめるなら、

もちよるものはなんでもいいかなっておもうんだ・・・」

笑魅「いろいろできるねっ」

音々「くふうすることで、いろいろできるんやね」

文乃「ウチ、いろいろやってみたいっておもうわー」

花菜「というわけで、ひるやすみになってから、

みんなでいろいろもちよってあつまることにしました。

そして、みゅーちゃん、タヌキくん、ブチヨークンをよんできました」

笑魅「みんなっ、いろいろもってきたかつ」

珠輝「いろいろと、のう」

部長「いやぁー。。。ナベのざいりょうなんぞを、おもちしたのだ」

美優「よさそくなんくもってきたでくくく」

文乃「ウチらもバッチリー」

部長「ではさっそく、ヤミナベ会をもよおすとするのだ」

音々「って、ヤミナベ会かいな」

花菜「うん・・・それも楽しそう」

音々「って、楽しいんかい」

美優「ななちゃんがゆくなら楽しくくかもくく」

笑魅「ナベにつ、コーシーマメっ、いれるよっ。ニガミばしってウマイっ」

珠輝「フロムこたい、トウえきたいとなるざいりょうをいれるとは、しんかんかくじゃのお」

音々「ドリッブしいひんのかい。マメそのままかいな。

いや、ドリッブしても、きょうれつか」

部長「ワタクシは、にこごりをつくるためのざいりょうをばいれさせていただくのだ。

127年はきふるした、せんぞだいたいだったわる

ねんだいもののカワグツをいれておくのだ」

珠輝「フロムこたいトウえきたいをまたしてもいれるとは、ブチヨークもやるのお」

音々「って、カワグツかい。ボクはえんりよしとく」

文乃「ウチもえんりよするわー」

美優「おかんもく」

そんじやつ、おんがくでもききながらっ、おかしたべよっ。

えみのもつてきたおかしっ、たべてっ」

花菜「えみちゃんが、もってきてくれたおかしをならべてくれました。

じゃがいもをあげたものに、いろいろなあじのソースをつけてたべるみたいです」

笑魅「つけるソースによってアジがかわるよっ、いろいろためしてっ」

文乃「ありがとー、もうなー。むにむに。これ、チリソースやねー、おいしー」

花菜「こっちは、からしマヨネーズ・・・ぺたぺた、もぎゅもぎゅ。おいしい」

笑魅「どんどんたべてっ」

美優「おかんのもつてきた~~~~くだものも~~~~たべてな~~~~」

文乃「わっ、このリングゴ、おおきーっ」

美優「あじもえ~~~~で~~~~」

音々「むしゃむしゃ。ホンマや、ミツができて、タネもなくて、なにより、あまい！」

花菜「もぐもぐ。おいしい・・・」

笑魅「しゃくしゃくっ。むむっ、リングゴといいつ、デカイヒトといいつ、

ずうたいばっかでかいっ。どうせっ、えんげいぶからもらってきたんだなっ」

美優「ん~~~~ん~~~~。ほけんしつにきたおとこのコからもらった~~~~」

一同「みつぎものかつ」

音々「どうりでやたらおいしいわけやわ」

文乃「みやげもんかー、おいしー」

美優「たくさんもらってん~~~~。どんどんたべてな~~~~」

花菜「おいしい・・・」

笑魅「みてっ、えみっ、たくさんアクセサリーもってきたっ。ほしいひとにかしてやるっ」

花菜「わっ、かわいい」

文乃「どれもすてきー」

美優「センスえ~~~~」

音々「これ、カバンにつけたいなあ」

花菜「うわぁ・・・」

文乃「えみちゃん、センスえーなー」

笑魅「えへへへっ、そっ？かりたいのいってっ、かすよっ」

文乃「かりたいの、ごっつたくさんあるわー」

音々「えみ、こんなしゅみをもってたんやなあ」

笑魅「まあねっ」

花菜「えみちゃんのこと、ちよつとわかった・・・」

文乃「いろいろあんのやねー」

美優「そ〜そ〜。おかんな〜〜〜〜、

ネコのしゃしん〜〜、もってきたで〜〜〜〜」

音々「へえ、かわいいーなー」

花菜「かわいい・・・」

音々「みゅーのかつてるネコちゃんなん？」

美優「う〜〜ん〜〜。まえかったネコちゃんやねん〜〜〜」

花菜「まえ・・・？」

美優「きょねんなくなつてん〜〜〜」

花菜「・・・」。

音々「そつかあ」

笑魅「えみのぜんっぜんっ、いらなくなつたネコのアクセサリーっ、
だれかほしいひといないかなっ」

花菜「ネコ・・・」

笑魅「ぜんっぜんいらなくなつたのほしいひとつ、いないかなっ」

美優「もらつてえ〜ん〜ん〜ん？」

笑魅「ネコなんてっ、どうせいらんからっ」

美優「うあ〜〜〜ありがと〜〜〜」

部長「笑魅クンてば、ホントはそういうこなのだ」

花菜「わっ、いきなりあらわれたブチョーくん」

笑魅「どこからできたっ」

文乃「えみちゃん、ヤミナベはたべんでえーんー？」

笑魅「あんなコーシーのあじがするにがいナベっ、くえるかっ」

音々「ああたがいれたんやがな」

花菜「ヤミナベ、けっきよくどうしたの・・・？」

部長「しんせんなお肉をば、たくさんほりこんで、

すべて珠輝クンのらんちにしたのだ」

一同「もしやそれ、ぎゃくたいなのかつー!？」

もちよりあつまり ↓ みんなであつまりもちよつたものでたのしむ ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ。」

ブチヨークンのホントのなまえてってなんなの？」

音々「それがボクにもわからんのやわ」

文乃「いもうとの、みゅーちゃんにもわからんねんてー」

花菜「え、いもうとさんにも？」

音々「そおやねんで。あのブチヨー、ナゾがおおいやんなあ」

笑魅「ねっねっ、えみのナマエってどうかくのっ？カタカナでっ」

一同「ここにもつわものがひとり・・・！」

花菜「そして、べつのひ」

文乃「ウチらの楽校の、ふゆのせいふく、すごいかわいいねんでー」

音々「ボクも、すごかわいとおもうわ」

花菜「ホント？みてるの、たのしみだな」

部長「あれはワタクシが、でざいんしたのだ」

一同「って、アンタが力ヨッ！」

花菜「そして、べつのひ」

文乃「ウチらの楽校の、ふゆのしょくどうのうどん、すごいおいしーねんでー」

音々「ボクも、すごおいしいとおもうわ」

花菜「ホント？たべるの、たのしみだな」

部長「あれはワタクシが、シコミしてるのだ」

一同「って、アンタが力ヨッ！」

花菜「そして、べつのひ」

部長「セイトカイチヨーけんげんで、たったいまきめたのだ。おとねちゃボゲッ！」

花菜「みゅーちゃんの掌底がブチヨークンのみぞおちにきまった」

花菜「そして、べつのひ」

部長「セイトカイチヨーけんげんで、たったいまきめたのだ。おとねちゃドバッ！」

花菜「ブチヨークンのからだから、みどりいろのものがふきだした」

花菜「きょうは楽校のそとの、おとしよりむけ介護福祉施設まで、

大学院、幼稚部のひとたちといっしょにきています。

なぜわたしたちもきているかというと、

幼稚部のコたちを、福祉施設までおくりとどけるためです」

笑魅「わかりやすいっ、かいせつっ」

美優「うまい~~~~」

花菜「そういわれると、なんだか、てれる・・・」

子供「おねえちゃんたち、もうかえんのー?」

笑魅「おねえちゃんっ!?!うれしいことをいつてくれるっ」

花菜「ふつうのいいかただとおもうけど・・・」

音々「なな、えみからするとうれしいねんで」

花菜「???」

美優「幼稚部のコたちって~~~~、なんで福祉施設までくることになったん~~~~?」

音々「福祉施設のおじいさん、おばあさんたちとの、ふれあい会のためやで。

ふれあいをとおして、おたがいがいいことがあるように、ちゅうこっちゃで」

美優「な~~~~る~~~~ほ~~~~ど~~~~」

文乃「つて、しらんで、ここまできとったんかいっ」

花菜「大学院生のひとたちは、なんできてるの・・・?」

音々「介護科のじっしゅうのためやねんで。ふだん学校でべんきようするだけとちごて、

じっさいにやってみることをとおして、いろいろまなびたいんやるなあ」

笑魅「カイゴ力かつ、なんのことかつ、よくわからないけどっ」

美優「カイゴか~~~~。カンゴとちかいところにある、ぶんややね~~~~」

文乃「みゅーちゃんに、かんけーあるねー」

美優「そやね~~~~」

音々「ボクらの学校は、かんごしさんや、福祉かんけいのひとたちを、

ようせいするためのかていも、もっとなねんで。

みゅーが、ないぶしんがくできるとええなあ」

美優「そやね~~~~」

音々「さてと、ぶじにおくりとどけたことやし、そろそろボクらはかえるかあ」

笑魅「どうせならっ、なんかしてかえるっ」

美優「なんかって~~~~いうてもな~~~~う~~~~ん、なにしょ~~~~」

文乃「シヨクインさんのじゃまになっても、こまるしなー」

音々「えみ、ここはあそぶためのトコとちゃうねんで」

笑魅「あそぶっていうよりっ、なんかやくにたてるようなことっ、したいっ」

美優「おかんもくくなんかしてきたいわくくく。」

かんごしさんになるうえでくくやくにたつかもくくく」

文乃「なんかかー」

音々「ううん、そやなあ、こういうときは、なのではんやね」

美優「ななちゃんくくく、なんかえくくすまいるかんがえてくくく」

花菜「ううん・・・そうだね、こういうときは・・・なにか・・・。」

たのしんでもらうといいかもしれない・・・」

文乃「たのしんでもらうってー?」

美優「たのしむんとちごてくくくたのしんでもらうんくくく?」

音々「どゆこつちゃ?」

たのしみおくろう ↓ たのしんでもらうことでじぶんがうれしくなる

笑魅「たのしんでもらうってっ、どういうすまいるなのっ?」

花菜「ひとによるこんでもらうために、たのしいことをいろいろするっていう、

↓ こんなすまいる ↑ なんだ。

ゲンキをなくしてるひとにゲンキになってもらうとか、

こどもさんのあそびあいてをするとか、

おとしよりのかたによるこんでもらうとか、そういうのがいいかなって・・・」

音々「ふんふん、そういうのなんやね」

花菜「ひとにたのしんでもらうのが、じぶんにとってうれしくて、

そういうたのしんでもらうことをして、じぶんもすまいるになれるんだとおもう」

音々「カンシンやなあ」

笑魅「えみっ、そういうのすきだよっ」

美優「おかんもくく、ひとにたのしんでもらうのはすきかなくくくくく」

花菜「 ↓ こんないいところ ↑ はっっていうと、

ありがとうといってもらえるのがいちばんのたのしみで、うれしきなんだ。

じぶんがひとによるこんでもらえてるとか、

ひとのやくにたつてるとおもえるのもいいところだよ」

美優「そういうのくくくすきなほくくくやわくく」

文乃「みゅーちゃん、そんなかんじがするー」

音々「たしかに、みゅーにむいてそうやなあ」

笑魅「えみにもむいてそうっ」

花菜「↓ こんないるもの ↑ は・・・うーん、

たのしんでもらうことによってちがって、

たのしんでもらうことによって、かえることになるかなっておもっよ」

音々「いろいろってことかあ」

笑魅「わかったっ」

花菜「↓ こんなやりかた ↑ をいうと、

ともだちにたのしんでもらうとか、かぞくのこどもさんやおやごさんに、

たのしんでもらうというのもいいことだとおもっし、

ほかに・・・おなじ職場のひとにたのしんでもらうのも。

福祉施設のこどもさんや、おとしよりのかたとか、

そういうひとたちに、たのしんでもらうのもいいことかなっておもっんだ。

はなしあいてになるとか、おはなしをみせるとか、きかせるとか、

歌を歌うとか、がつきをひくとか、おやつをつくってもっていくとか、

そういうことをするとよろこばれて、たのしんでもらえる・・・」

文乃「じぶんがしてあげられるひとに、じぶんのできることをすればいいのかもしれないね」

花菜「そうだね・・・できることをすれば、ほんとにそれでいいとおもっ」

音々「なるほどなあ」

笑魅「どういふふうにたのしんでもらうかつ、いろいろかんがえられそうっ」

花菜「すまいるをするため、みんなで福祉施設のなかをあるいています」

文乃「介護科のひとたちって、おんなのひとがおおいんやー」

音々「大学院生って、カッコええなあ」

花菜「オトナってきがするね」

部長「いやぁー・・・、ワタクシがハクシになるときに、

おとねえちゃんたら×□×□!」

音々「へー」

笑魅「だれがバカをつれてきたっ。せきにんしゃでてこいっ」

美優「ごめんな~~~~おかんやわ~~~~」

笑魅「おのれっ、デカイヒトがよんだかつ、

バカはヨウチブのこどもよりタチがわるいっ」

美優「ブチヨークんに、福祉施設でうるさくすると、

おかんがびよーいんまできゅーきゅーしゃでつれてく、
ってゆーてあるねんーそれできゅーかなー？」

音々「まあそれでなら。いや、よくないか」

花菜「ブチヨークん、なんで福祉施設にきたの？」

部長「イガク部をめざすワタクシとしては、いちどカイゴやイリヨウといったものに、
じっさいにふれて、たいけんしてみたかったのだ。あんどおとねえちゃんもいくから」

音々「いちぶはマジメなりユウなんやな」

笑魅「ならゆるすっ」

音々「ほな、ここからはじゅうこうどう、ということであえ？」

一同「おげ！」

笑魅「えみつ、とりあえずっ、ヨウチブの、こどものめんどろをみてるっ」

美優「おかんーそやなー、おとしよりのかたのいるとこいつてー、
リハビリのおてつだいであー、シヨギのあいてしてくるわー」

部長「むずかしいことをせず、シヨギするだけでじゅうぶんなのだ」

音々「ボクと、ふみのんのふたりでなにかしてこよかあ」

文乃「そやねー」

部長「ワタクシもば、ごどうこうさせていただくのだ」

美優「きょうはーるさしんときやー」

部長「いえさ！まずは、ぎたあのえんそうをばして、みなさんにきいていただくのだ」

音々「ブチヨーにそなたとくきが」

文乃「かっこいー」

部長「いやあーっはっはっは。ぎたあこれくそん部のブチヨーだけあるのだ」

音々「コレクションのほうか」

部長「こうみえて、うでまえばおひきなのだ。

なつかしの、むじくそんぐをばおひきして、みなさんにきいていただくのだ」

音々「きたいしとく・・って、なんでおおきギターを福祉施設にもってきとんねん」

文乃「たのしみー。ウチとおとねえで音楽にあわせて歌うわー」

音々「それもええなあ、おしよかあ。ボク、うたえるやるかあ」

部長「うたえるよう、ゆうめいどころをば、おひきするのだ。

じかんがあれば、おとねえちゃんへのらぶそんぐをも、おひきするのだ」

音々「へー」

花菜「みゅーちゃんといっしょに・・、いっつい？」

老婆「蒼遥の口はみんなゲンキやっていうはなし、ようきくわ」

花菜「あ、そうですか・・・」

あ・・・、おばあさんも、ゲンキそうでうれしいです」

老婆「そう？こうみえても、ね。だいぶカラダのわるいのがつづいとんのやわ」

花菜「あ、あ、あ、あの、すいません！むしんけいなことといって！」

老婆「ええで、ええで。まだまだわかいなあ、ええことやで」

花菜「こどもなんです、わたし。なんにもしらなくて、

それに、さっきもいろいろともだちにいつてたけど、

じっさいには、わたし、みんなとちがって、なにもできないんです」

老婆「じゅうぶん、がんばっとるし、やくにたっとるで」

花菜「え？」

職員「タカハシさん、にゆうよくのおじかんですよ」

老婆「おじょうちゃん、ありがとう、ほなな」

花菜「あ、はい、ありがとうございます」

・・・どこかへいつてしまった、おばあさん。

・・・わたし、やくにたてたのかな・・・」

たのしみおくらう ↓ たのしんでもらうことでじぶんがうれしくなる ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「やつほーっ、シタツパっ、まだいてたかつ」

珠輝「ふおっふおっふおっ。さっきからずっとここにおったぞい」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「やつほーっ、シタツパっ、まだいきでたかつ」

珠輝「ふおっふおっふおっ。としはえみちゃんと、ほとんどかわらんぞい」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「やつほーっ、シタツパっ、まだいきしてたかつ」

珠輝「ふおっふおっふおっ。こきゅうをやめるときはプールのときくらいじゃぞい」

花菜「そして、べつのひ」

珠輝「べっぴんさんのななちゃん、鰯で鰯でもどうじゃ？」

花菜「イワシでアジってどういうこと・・・？」

花菜「そして、べつのひ」

珠輝「鰯をもってきてくれれば、はなしをきくぞい」

花菜「そんなに、さかながすきなんだね」

音々「はなしをきくって、ええんかい、そんなこというてからに」

花菜「そして、べつのひ」

音々「楽校の女子のにんきでは、ブチヨー派とタヌキ派のハバツでいうと、

ほとんどがどっちでもない派」

花菜「そして、べつのひ」

珠輝「かわゆいななちゃんに、コーシーグーヌーをさしあげますわい」

花菜「ありがとう・・・コーシーグーヌーって、なにこれ？ド口みず・・・？」

音々「モリにくわわらへんひとたちがのむ、のみものやで」

文乃「ごっつおいしーでー」

笑魅 「おいしいよっ、のめっ」

花菜「ごわいけど、いただきます・・・ぐびぐび・・・ほんとだ、おいしい」

文乃「コーヒーぎゅうにゅうそっくりのアジやけど、アジとちゃうねん」

笑魅「あははははははつ、ミスメガネっ、うまいっ」

音々「きれいに、かけとるなあ」

花菜「??:?」

文乃「えへえへ」

花菜 「タヌキくん、ありがとう……」

珠輝 「これでまた、ワシのカブがあがるのじゃ」

文乃「それもまた、したところかいっ」

音々「タヌキのやることは、よおわからんわ」

花菜 「いま、おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたし・・・の3にんで、

楽校からかえろと、ゆうがたに楽校のいりぐちのちかくをあるいています」

文乃 「ななちゃん、かいせつありがとー」

音々 「ななのかいせつ、まいどうまいなあ」

花菜 「そう？なれてきたのかな」

文乃 「きょうもたくさんべんきょうしたわー」

音々 「べんきょうしたという、そんなきがするだけのきがするわ」

花菜 「ゆうやけがきれい・・・」

文乃 「そやねー」

音々 「ぎぶんが、おせんちになるなあ」

部長 「いやぁー・・・かがやくゆうひがまぶしい！」

文乃 「あつ、ブチヨークン」

部長 「いやぁー・・・はっはっはっは。ぐいぶにん、おとねえちゃん、みなさん」

音々 「いやは」

部長 「いやぁー・・・どらまてくな、このゆうひ！」

音々 「ワタクシとおとねえちゃんがせーしゅんどまんなか！」

音々 「へー」

花菜 「いいふんいきが・・・」

音々 「せっかくいいきぶんやったのにな」

部長 「それはそうと、おとねえちゃん、みなさん。ただいま楽校のいりぐちのまえで、

えんげき部のみなさんが、えんげきと、かみしばいをひろうしているのだ。

ぜひみていってほしいのだ」

文乃 「さすがブチヨークン、えんげき部ブチヨークンとしてのつとめをがんばってるね」

音々 「つとめてゆうほど、そんなありがたいもんなん？」

部長 「ワタクシ、ゆびにんぎょうで、おとねえちゃんとワタクシがでくる、

おとねちつくらぐすとーりーをば、ただいまえんじておりますのだ」

音々 「へー」

花菜 「えんげきをしているちかくで、ブチヨークンがゆびにんぎょうげきをしています。

おとねちつくらぐすとーりーをみるの、えみちやんだけみたいです」

笑魅 「バカっ、はやくつづきつづきっ、つづきしろっ」

部長 「いやぁー・・・おとねえちゃんから、えみちちゃんからと、

ひくてあまたなワタクシ、おとめなかせ！」

音々 「へー」

花菜 「あ、あれは・・・。ゴメンなさい、とおくでタヌキくんもみてました」

部長「いやぁー……珠輝くん、こちらへかもん！」

珠輝「ひっそりみてたんじゃがのお。バレたみたいじゃな。いやっはぁ、みなさん」

文乃「いやっはぁ、タヌキくん」

音々「いやはタヌキ」

珠輝「このゆびにんぎょうげき、みててけっこうたのしいぞな」

部長「わかるひとには、わかる！このすんばらしいじゅんあいげき！」

珠輝「げんじつではアイゾウゲキとなりそうじゃがのお」

音々「そんなもんか」

珠輝「ふおっふおっふおっ」

笑魅「このおはなしはっ。セイシュングンゾーゲキであるっ」

文乃「そーなんー？」

部長「このおはなしは、おとねえちゃんとワタクシをちゅうしんとする

せいしゅんじゅんあいものがたりなのである！」

音々「へー」

珠輝「ううむ、そうじゃったかのう？」

音々「ちゃうやろ、あきらかに」

笑魅「トガキっ、えみもこういうっ、おはなしつくるのっしたいっ、

えみにできそうなそういうっ、おてがるでたのしいすまいるっ、かんがえてっ

珠輝「そじゃの、そういうすまいるをこさえてもらえると、ワシもたすかるでの」

音々「えみのために、ボクからもたのむわ」

部長「ほーぞい！」

文乃「ななちゃんがかんがえるか、たのしみー」

花菜「うん、そっか……なら……そだね……」

うん……みんなのおはなし……っていうのを、かんがえてみるね……」

みんなのおはなし ↓ ほんとにいる人がでてくるおはなしづくり

笑魅「でっ、どんなすまいるなのっ」

花菜「どういうすまいるかっていうと、 ↓ こんなすまいる ↑ で、

ホントにいるひとたちがでてくる、そういうおはなしをつくるすまいるなんだ」

文乃「ブチヨークンがいまやってたのみたいなんやねー」

花菜「うん。ホントにいるひとをおはなしにださせることで、

おはなしが、てがるだけだのしいものなるかなっておもっ

笑魅 「バカとガリベンがでてるはなしっ、おもしろいよっ」

珠輝 「ワシも、じっさいにいるひとたちがでけると、おもしろくなるとおもっわい」

笑魅 「じぶんでかんがえたおはなしがっ、

かんたんにいいものになるっていうのがっ、よさそうだねっ」

部長 「花菜クン、いいとこのかいせつをば、ひとつよしなに」

花菜 「そだね・・・ ↓ こんないところ ↑ は、

ホントにいる人たちを、つくりもののおはなしにださせることによる、
ふつうのおはなしとはちがう、わらいやたのしみ、ジーンとくるかんじが、
いいとこなんじゃないかなっておもっうよ。

それと、じぶんでかんたんにおはなしをかんがえて、つくることができ、
それをひとにみせるたのしさもあるとおもっうよ」

部長 「らじゃー!」

花菜 「うん・・・」

音々 「いるものをおしえてほしいねんけど、どんなんがいるん?」

花菜 「 ↓ こんないもの ↑ をいうと・・・。

ノートがあると絵をいかにかみしばいにできるし、

ノートがあればもじをいかいて、おはなしをもじでつたえられるとおもっうよ。

ビデオカメラがあればホンカクテキなものもつくれるかな。

ものがなくても、くちでおはなしをはなしてもいいよ」

部長 「おてがるにも、ホンカクテキなものだ」

珠輝 「いろんなひとがたのしめそじゃのお」

文乃 「くちではなすだけでもええねんなー」

文乃 「じっさい、どうやってつくるん?」

花菜 「 ↓ こんなりかた ↑ はね、

おはなしをかんがえてつくって、そしてできあがったものをひとにみせるんだ。

てじゅんはむずかしくなくて、かんがえて、つくって、みせるだけなんだ。

かみにコトバをいかいてみせるというのもひとつのやりかたで、

くちでいうのもひとつのやりかたかな。

絵にかいて絵本やかみしばいにしてもたのしいよ。

はなしは、ながくてもみじかくてもいいんだ。

部長「みんなでかんがえるのだ、つくるのだ、みせるのだ」
一同「らじゃ！」

笑魅「えみっ、ひとをおきかえるのをやってみるっ」

音々「ボクは、いちからかんがえよかな」

珠輝「えみちゃん、ワシもいっしょにつくってかまわんかの」

笑魅「いいよっ」

珠輝「ワシがおはなしをノートにかいていくでの。

おはなしをかんがえるのは、えみちゃんにまかせるわい」

笑魅「ありがとっ」

音々「ボク、ノートにかんがえたのをかいてって、あとでじぶんでよみあげるわ」

美優「みんなの……たのしみ……」

文乃「たのしみやわー」

花菜「で、えみちゃん、おとねちゃんのふたりが、

15ふんくらいたって、おはなしをつくりおわりました」

笑魅「おきかえるだけでっ、つくるのっ、かんたんだったっ」

音々「ボクもけっこうすぐつくれたで。みじかいからかなあ」

部長「ワタクシにみせるのだ！」

美優「みんなの……たのしみ……」

珠輝「みゅーちゃん、おなじことを2かい、いうとるぞ」

美優「そやったっけ……」？

音々「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

珠輝「まず、だれのはなしをよむのかの？」

笑魅「じゃっ、トガキっ、えみのをよんでっ」

花菜「わたしがよむの？うん、じゃ……みんな、じゅんびいい？」

一同「おげ！」

花菜「だいまい、えみこちゃん……はじまりはじまり。

むかしむかしあるところに、シタツパじいさんとミスメガネばあさんがいました」

音々「なんなんだか、ミスメガネばあさんて」

花菜「おばあさんがみずうみでチョコをたべていると、チョコのなかから、

それはそれはアイドルみたいなかわいらしいおんなのこがでてきました」

文乃「あぶなっ、ウチ、おんなのこをもうすこしでたべるとこやんっ。

それにしても、アイドルみたいなおんなのこ、えみこちゃんとなづけよう。

えみこちゃんはブチョたいじにいききたいのかえ？」

笑魅「えみこちゃんっ、いきたいっ、いくよっ」

花菜「えみこちゃんはおともの、

ウシのトガキ、ブタのガリベン、ニワトリのデカイヒトをしたがえ、
ブチヨたいじへとでかけました・・・わたし、ウシみたいなのかな・・・

・・・ウシはシヨックをうけましたモー」

音々「まあ、ボクもブタやし、いいっこなしということでいこブー」

美優「たべものになるいきものばっかやね〜」コケッコ〜」

花菜「えみこちゃんは、ブチヨのすむ、ブチヨのへやへとたどりつきました」

笑魅「えみこちゃんっけんざんっ。ブチヨはどこっ」

部長「がおー、ブチヨなのだ。ないすとみつ、えみこちゃグハっ！

なんとっ、たたかうの、さっそく？」

笑魅「けちよんけちよんにするっ」

花菜「えみこちゃんとブチヨのらんとウシーン・・・いっぽうてきにやられるシーン？

・・・は、こどものきょうじょうよくないため、しょうりやくします」

文乃「みじかつ」

笑魅「トガキっ、けずるなっ。てっとりばやくおわらせたかったんかつ。

いちばんのみせばは、らんとウシーンなんだぞっ、ぶんぶんっ」

花菜「そしてえみこちゃんは、こらしめたブチヨからたいりょうのおかしをまきあげ、

もちかえったあと、おじいさん、おばあさんにおかしをあげることなく、

ひとりじめしてたべましたとき。

それと、おとものさんびきにおやつをあげてふとらせて、

あとあとのしみだなあとおもいましたとき。

それと、えほうまきたべたい。おしまい。・・・ひどい・・・」

美優「あはははは〜。たべものことばっかやった〜」

珠輝「ワシなんか、わざわざ、やくづくりしたのにセリフなしじゃぞ」

文乃「あははははー。おじいさんになるの、はまりやくなのになー」

笑魅「つぎのおはなしっどうするっ？」

音々「ボクが、かんがえたのをいうわ。

みゅーが、かんごしさんになったあとのはなし。

だいめいは、みゅみゅさん、かんごしさんになる」

美優「おかんのはなしか〜〜〜うれし〜〜〜」

笑魅「デカイヒトかつ」

花菜「あんしんしてみれそう・・・」

部長「りすんぷりいず!」

珠輝「みゅーちゃんじゃな」

文乃「どきどきー」

音々「これは、蒼遥楽校のみゅみゅさんというおんなのこが、
かんごしさんになったあとのおはなしです。

かんごしになったあとのみゅみゅさん、まいにちしごとにおわれています。

『たいへんやわ〜しんどいわ〜〜〜うあ〜〜〜』

あたまのなかでもいえがいていたことと、

げんじつとのあいだでくるしむまいにち。

あるひ、おくすりをかんじゃさんにわたしまちがえ、

じょうしの、かんごしちようさんにこっぴどくおこられます。

『こんなこともできんのかっ、どあほっ』

おちこむみゅみゅさん。あきらめていなかへかえろうとおもったりします。

でも、まだつづけたいというきもちもつよく、あきらめきれません。

『グッスン・・・』

そしてあるひ、かんじゃさんからこんなことはいわれます。

『みゅみゅさんは、いつもニコニコしていいね。』

みゅみゅさんがいてくれるだけで、こっちもゲンキになれる。

みゅみゅさん、かんごしさんがいちばんむいてるしごとだよ』

みゅみゅさんは、そのことばをきいて、

やつぱりじぶんはこのみちにすむべきなんだとおもえました。

そしてまた、みゅみゅさんは、まいにち、かんごしさんとして、

ニコニコとし、まわりにゲンキとえがおをくばることにしたのでした。おしまい」

笑魅「ぐずっ、なけたっ」

花菜「そぼくだけど、いいはなし・・・」

珠輝「ございくしてないところが、ええのお」

文乃「ウチ、うるつときたわー。なんでやるー」

音々「あほみたい、ボク、じぶんでつくってじぶんでいうて、

それやのに、なんかなきそうやわ」

美優「おとねえちゃん、おかんな、ごっつい、うれしかったわ〜〜〜。

いまのはなし、これからずっと、わすれんでおぼえとくわ〜〜」

部長「ところがこもっていたのだ」

みんなのおはなし ↓ ほんとにいる人がでてくるおはなしづくり ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ」

部長「ワタクシ、このまえの楽校ミスコンテストで、

もちろんおとねちゃんに、きよきーぴょうをくれたのだ」

音々「へー」

珠輝「うれしいやらうれしくないやらじゃの」

音々「まあ、そんなーぴょうはなあ」

笑魅「むむむむむむっ、デカイヒトがグランプリだったあれかつ」

文乃「ウチ、ジミなことやし、ジミーちゃんってよばれたいな」

笑魅「あはははははははっ。いいねっジミーちゃんってっ。ピッターっ」

音々「ホンマかいな。それと、がいこくのひとのなまえかいな」

文乃「ウチ、楽校ミスジミコンテストがあれば、

ジミーさのにんきとうひょうでグランプリになれるねんで」

珠輝「ふおっふおっふお。わしとしては、ふみのんちゃんに

ーぴょういれてさしあげますわい」

笑魅「あはははははっ、ガリベンならミスジミコンテストの

ジュングランプリになれるよっ」

音々「そんなん、かんべんしてほしいわ」

花菜「ふみのんちゃんって、こんなジョーダンいうんだ・・・」

笑魅「わらえわらえっ、ほらほらっ、トガキもいっしょにわらっちゃえっ」

花菜「う・・・」

文乃「ななちゃんにも、わらってほしいわー」

花菜「・・・」。

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「やっほーっ、トガキっ」

花菜「ト書き・・・。じぶんなんて、そんなものかとおちこむ花菜」

音々「えみ、せめてかいせつさんくらいにしとき」

花菜「そして、べつのひ」

美優「ななちゃーん。ななちゃんはどうしておかんたちの楽校に、

てんこうすることになったん々々？」

花菜「え・・・それは・・・」

笑魅「シヨクドウでまいにちおいしいもんつ、タダでたべるためかつ」

音々「えみはホンマに、そういうりゆうでボクらの楽校にでんこうしてきてそうでこわいわ」

花菜「わたしは・・・いえのしごとのつごう・・・おやがテンキンして・・・」

美優「へ～～～～そくなんや～～～～」

笑魅「えみもてんこうしてっ、このガッコウにきたんだよっ」

文乃「えみちゃん、がいこくそだちなんやんねー。まえはこの国にすんでたんー？」

笑魅「ウマイヨ・メチャウマイ・キョーワコクってとこっ」

音々「そこ、ちゃんとちきゅうにある国なん？」

文乃「えみちゃんにあってやねんってツツコミたいけど、えみちゃんのことやから、そのナントカキョーワコクっていうのは、きつとボケとはちゃうんやるな」

音々「みゅーこそ、なんでウチの楽校をえらんだん？」

美優「おかんがこの楽校をえらんだのは～～～～」

う～～～～ん。なんでやったかな～～。わすれたわ～～～～」

音々「んだいじなこと、わすれるとは」

文乃「みゅーちゃんにあってやねんってツツコミたいけど、みゅーちゃんのことやから、そのわすれたっていうのは、きつとボケとはちゃうんやるな」

音々「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

花菜「わたしがこの楽校にでんこうしてきた、

べつにあるもうひとつのわけ・・・いえない・・・」

花菜「そして、べつのひ」

部長「えがおをみせるというのは、じぶんとあいてがなかよしであるということ、

あいてにつたえるということなのだ」

花菜「・・・」

花菜「そして、べつのひ」

音々「ブチョーなんかは、なにかんがえてニヤついとんのかしらんのやけど、

きつとみんな、むじゃきにホントのえがおをみせてくれるとおもうで」

文乃「ホントのえがおかー。どんな人でも、きつとどこかでそういうかおしてるんやるな」

花菜「・・・」

花菜「そして、べつのひ」

珠輝「楽校で、みゅーちゃんのファンむけグッズがはつばいされれば、たくさんうれそうじゃのう」

文乃「あんなきれいな人やつたらうれるやるねー」

音々「すでに、みゅーの楽校ファンクラブができあがってるとかできあがってないとか。

まあでも、ボクのファングッズは、はつばいされても、かうひといいひんやるおなあ

文乃「ウチのもいーひんねー。でもウチのなんてどうせ、はつばいされへんわー」

笑魅「えみのはっ、だいにんきっ。しなぎれがゾクシュツっ」

音々「たいしたじしんやな」

文乃「みゅーちゃんグッズのうりあげは、

ウチという、みためにめぐまれないひとのためにキフされます」

珠輝「ふおふお。わしもごじまんのかみをきってモヒカンあたまにするから、

わしのとこにキフしてもらえるかのう」

文乃「あははははー。モヒカンー、かっこいいやんー」

笑魅「あはははははっ！えみのばあいっ、みためにめぐまれてるよっ、キフをもらえないっ」

音々「ホンマにたいしたじしんやな」

文乃「えへえへー」

部長「じよいなす！花菜くんもはなしにはいつてくるのだ」

花菜「う・・・」

音々「そやね。こういうのに、なれていかへんと、ね」

花菜「・・・」。

花菜「そして、べつのひ」

部長「おあいそわらいだって、おどっけにふるまうことだって、ときにはひつようなのだ」

珠輝「そうかもしれんのう」

花菜「・・・」。

ひとそしてねがい ↓ 花菜が楽校にいなかった日

花菜「きょうはなんだか、からだのちょうしがよくないので、

楽校をやすみ、いえでひとりで、おとなしくしている花菜です。

・・・って、なんでじぶんでじぶんのことをじぶんひとりでじぶんのいえで、かいせつしてるんだろ・・・ヘンなクセだな・・・。

これから花菜は、れいぞうこにいてある、きのう、えみちゃんからもらった、コーシーグーヌーをのみにいくところです。あった。のみます、ぐびぐび。

・・・またかいせつしちゃった。

ん、げんかんのチャイムがなったみたいです、げんかんまでむかう花菜」

笑魅「トガキつ、いるかつ」

花菜「えみちゃん、どしたの？」

笑魅「きのうあげたコーシーグーヌーの、しょーみきげんが

イッカゲツくらいすぎてるつ。のむときはきをつけたほうがいいよっ」

花菜「そうなんだね、おしえてくれてありがとう・・・え？いつかけつ？

もうのんだよ。しかも、きのうも、きょうものんだ」

音々「つまり、えみがすでにくさつとるもんをあげて、

しかもそれをなながのんだからこつなつたということやな」

花菜「あ、おとねえちゃん、どしたの？」

文乃「おみまいにきたでー」。

たぶん、やすんだん、コーシーグーヌーのせいやおもたわー」

花菜「ふみのんちゃん、おみまいにきてくれたんだね、ありがとう」

文乃「うん、きたわー。やっぱ楽校でマジミの3人がそろわんと、おちつかんかったわ」

美優「おなかいたにきくクスリくくもってきたでくくく。はい、のんでやくくく」

花菜「ありがとう・・・もううね、ごくごく・・・うん、きいたきがする」

部長「みゅーちゃん、そのクスリ、しょうきげんが14年ほどすぎてるのだ」

美優「えくくくくくくくくくく？あ、ほんまやくくく、ごめん、ななちゃんくくく」

花菜「なぬ、そうなの？もうのんじやつた」

珠輝「ハコのいろがあきらかにふるそうじゃのう」

音々「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

笑魅「んなクスリのむとつ、コーシーグーヌーよりっあぶないっ」

音々「もとはといえば、あたのあげたコーシーグーヌーがわるいんやがな」
笑魅「しょーみきげんがすぎててもっ、ゆがいてのめばっだいじょうぶっ。

それがセイカツのチエっ。たぶんっ」

文乃「むりやるー」

音々「ゲスイシヨリジヨウでも、とおさんかぎり、のめへんわ」

笑魅「どんまーいっ」

花菜「きをつかつてくれた、そのきもちは、すごくうれしいよ・・・。

それはそうと、みんな、いえにあがってあがって。

やるおそくまで、かぞく、かえらないから」

笑魅「じゃまするっ」

一同「おじゃましまーす」

花菜「わたしのへやに、はいって」

一同「らじゃー！」

花菜「わたしのへやにくる、おみまいにきてくれたみんな」

珠輝「おんなのコのへやにはいるの、はじめてじゃ」

文乃「ウチらみんな、ななちゃんのいえにくるの、はじめてやねー」

珠輝「はじめてといえば、ななちゃんが楽校をやすむなんて、はじめてのことじゃの」

笑魅「トガキっ、えみのあげたコーシーグーヌーのせいであつ、やすませてごめんっ」

花菜「ううん、からだのぐあいかわるいの、たぶんそのせいとちがう・・・」

笑魅「そっかつ、ちよつとあんしんしたっ」

文乃「14年まえのクスリのわるいこうかがきになる・・・」

笑魅「あとお、レモンもってきたっ、ビタミンおおいよっ」

花菜「ありがとう・・・え、レモン？」

音々「こういうときのいばんはメロンなんやけど、

からだにいいものをつてかんがえて、みんなでレモンにしようてきめてん」

花菜「うれしい、ありがとう。レモンとメロン、なまえがにてるね」

文乃「ダジャレネタにつかえるわー、おぼえとこ」

音々「ネタにすんのかいな」

美優「鉄分のほくは、だいじょうぶく？」

花菜「うん・・・」

部長「くさつてないコーシーグーヌーをもってきたのだ。みんなでのものだ」

一同「いただきますーす、ごくごく」

笑魅 「がぶがぶがぶっ・・・うっはーおいしいっ、

もーいっぱいっ、めーいっぱいっ、ちようだいっ」

文乃 「うーん、えみちゃん、ひとんちゃでー」

音々 「あつかましいやる」

笑魅 「どんまーいっ」

音々 「じぶんでゆうか」

珠輝 「みなやしゅ、アジはいかがかの？」

音々 「こらっ」

珠輝 「ふおっふおっふお、ダジャレじゃ、じようだんじゃ」

音々 「じょおだんかどうか、よおわからんわ」

文乃 「わるいこやなー」

文乃 「ななちゃんの、すまいるをかんがえるのにつこてる、

メモちょうか、ノートかなにかあるなら、みしてほしーわー」

花菜 「うん、そこにおいてあるよ」

音々 「うわっ、すごいりのノート」

美優 「こんなにくくあるんやくくくく」

花菜 「かんがえてほしいってみんなにいわれて、

そのばでおもいつきでかんがえることもおおいよ」

笑魅 「スゴっ」

音々 「いつもあれだけ、そのばでおもいつけるなんて、あたまのかいてん、よすぎやなあ」

花菜 「???・・・?」

笑魅 「トガキってっ、どうしてそんなにがんばってっすまいるをかんがえてるのっ?」

花菜 「・・・なんにもできないから、かな。わたしはなんにもできないし、

すまいるをあいだにはさまないと、みんなとなかよくなれないんだ。

でも、すまいるをかんがえて、みんなにしまってもらって、そうすることで、

それで、みんなとなかよくなれるから、かんがえてるんだ。

すまいるをしまってもらうことでもなかよくしてもらえるし、

それに、すまいるをいっしょに楽しむことで、

みんなとなかよくたのしんでいられるし・・・それでだよ。

そうしないと、わたしがホントにちゃんとなかよくしてもらえるか、わからない」

音々 「そっかあ」

部長 「すまいるをとおして、みんなとなかよくなりたかったのだ」

花菜「それに、まえみたいになりたくなかったから」

文乃「まえかー」

笑魅「まえてっ？」

音々「こらっ、えみっ」

花菜「わたし、まえにかよった学校で、みんなとうまういかなかったんだ。

ずっとひとりだったし、なかまはずれにもされたし、まいにちひとりでないでた。いやなこともされたし、だれもたすけてくれなくて、

じぶんなんてうまれてこないほうがよかったって、おもったこともある」

笑魅「トガキにひどいことするってっ、ゆるせないっ、そんなのサイテイだよっ。

なかまはずれにしてっ、そのひとにいやがらせするなんてっ、なにそれっ。

トガキはなんにもわるいことしてないのにつ、

ひどすぎる・・・ひどすぎるよ・・・、うう・・・かわいそう・・・、

ひどいよ・・・なんにんもで、なかまはずれに、する、なんて・・・。

いやなことまでして・・・そんなの・・・ゆるせない・・・、

ひどい・・・うっ・・・うっ・・・ひっく・・・」

文乃「うんー」

音々「そうやおもったわ」

美優「おかんもっ、そうなんとちゃうかってきがしてた」

花菜「こんどはもう、だれからもなかまはずれにされたくなくて、

それでいまの楽校にきてから、いまでずっと、すまいるをかんがえてたんだ」

笑魅「ひっく、えぐ・・・いままで・・・トガキのこと、

からかってきて・・・ゴメン・・・。

・・・トガキなんていいかた、しなぎやよかった・・・。

そんなリユウがあるなら、えみたちがひまなとき、

トガキにすまいるをかんがえてなんて・・・、

かるいきもちでゆって・・・ゴメン・・・う・・・う・・・」

音々「いや、そんなきにせんでええ」

部長「花菜くんは、みんなとなかよくなれたのだ」

笑魅「・・・？」

音々「うん、なのかんがえたすまいるは、ともだちになれるすまいるやで」

美優「ほかに、みんなのやくにたつすまいるもっ」

文乃「そうだよ、そのばにいるみんながもっとなかよくなれるすまいるもやわー」

珠輝「そうじゃ、いいおもいでをたくさんくれるすまいるもじゃわい」

部長「それだけでなく、たいせつなことにきづかせてくれるすまいるなのだ」

音々「ななとボクが、なかよくなるなんてこと、

そんなんありえへんで。みんなもそうおもとる」

文乃「ウチがななちゃんと、ホンマにホンマになかよしやってこと、

ななちゃん、しつてくれるとおもうわー。そのこと、しんじてほしい」

美優「そやで〜、それにな〜、おかんは〜、ななちゃんやったら〜、
もうだいじょうぶやっておもうわ〜」

珠輝「ワシもそうおもうのう。もし、ななちゃんにわるいことするのがいたら、
ワシがせおいなげしてこらしめちゃうわい」

部長「こわがることもふあんになることもしなくていいのだ。

みんな、花菜クンのところから、はなれていかないのだ」

笑魅「トガキはみんなのなかよしなんだよっ。

もうっ、なかまはずれにされることなんてっ、ぜったいにないっ」

一同「ななちゃんは、いま、ないてる。でもこれからはわらってわらって、ね？」

花菜「・・・スマイル?・・・うん、うん・・・すまいる、すまいる!」

笑顔♪ ↓ 純愛♡ ↓ 青春☆ ↓ スマイル? ↓ すまいる! ↓ おしまい